

500

50



始



500-50



藤澤衛彦編

日本の俗謡

日本歌謡叢書其内

大正
10.10.21
内交

緒言

◇民間歌謠（民謠——俚謠、俗謠、童謠等。）の發露は、時代民衆共同の聲の代表的表現の一種相である。そこに個人の特種な傾向は見られないとしても、國民の眞の風俗、好尚、信仰、思想を窺ふ事は充分に出来る。若し、一國の文藝が、天才的事業の精華であると言はれるなら、民間に於ける歌謠は、その天才を産出した特異の背景の拔萃とも言はれよう。上代より今日に至れるわれわれの文藝は、その時代民衆の聲であつた全歌謠をどのやうに聞き入れたか、その聲は如何にして天才を啓發したか。われわれは、常に文藝の尺度に照して、頗る其最小を哀れまれた日本歌謠を顧慮し、われわれの共鳴する眞の國民性の表はれである、思想、感情、趣味、風尚の純なる姿の、顧みられざりし美しさに同情する。

◇私が茲に日本歌謠叢書の編輯を企てたのも、一意其點を顧みさせられたからで、

此叢書に於て、便宜上、私は、日本の民間歌謠を、(一)日本の古謠、(二)日本の地謠、(三)日本の小歌、(四)日本の小唄(三卷)、(五)日本の民謠、(六)日本の長い小唄、(七)日本の俚謠、(八)日本の俗謠、(九)日本の流行唄、(十)日本の童謠を上梓して、古來の民間歌謠の記録本を統一したいと思ふ。従つて本書の蒐集本の順序は、時代順たる事を心がけた。そして又、其一冊に於ては、成べく、或は流行唄と俚謠との如きを混然たらしめざる事に注意したが、時に原本それみづから、俚謠と俗謠とを混へ記したるものなどがあつて、正確なる區別の上から、妙に思はるゝ跡を残してをるやうに思はるゝ節もないではないが、それら皆、まとまりたる一冊の原本を分離するの却つて原形を示す爲に不忠實であらう事を思つたので、止むを得ず、私に之を決定してしまつたのであつた。

◇かくて、私の十名題のその一つ一つは、次の時代の歌謠を包含する事になる。

日本の古謠

(一) 傳説時代の歌謠

(二) 外邦樂輸入時代の歌謠

(三) 内外樂融和時代の歌謠

(四) 雅樂圓熟時代の歌謠

(五) 雅俗樂分岐時代の歌謠

日本の地謠

(六) 語物時代の歌謠

(七) 能樂創起時代の歌謠

日本の小歌

(八) 小謠流行時代の歌謠

(九) 小唄發現時代の歌謠

(十) 蛇皮線輸入時代の歌謠

日本の小唄

(十一) 三絃樂創始時代の歌謠

(十二) 三絃樂漸盛時代の歌謠

(十三) 三絃樂隆盛時代の歌謠

日本の民謡

(十四) 諸國民謡近世調大成時代の歌謠その他

日本の長い小唄

(十五) 民間舞踊勃興時代の歌謠その他

日本の俚謡

(十六) 農事唄普及時代の歌謠

(十七) 地方唄大成時代の歌謠その他

日本の俗謡

(十八) 俗曲隆盛時代の歌謠その他

日本の流行唄

(十九) 時代の流行唄その他

(二十) 地方唄流行時代の流行唄その他

日本の童謡

(二十一) 時代別としての童謡

(二十二) 分類別としての童謡

◇以上のほかに、歌謠志と、考證註釋本の權威ある本を最後に上梓せしめて、さて、そこに、本叢書は、ただに記録本として貴重たるばかりでなく、全體を通じて、一の歌謠史たるべき完全を期せしめる筈である。

◇尤も、本叢書中には、狂言、謠曲及び淨瑠璃、河東、豊後、常盤津、富本、園八、清元などの長い小唄で、他に類本が多いものは、略いてあるが、その他、古より今に

至る民間歌謠の權威ある種は、大概を網羅したつもりである。特にその各冊に於て、例へば「二葉松」の如き、甚だ貴重なる歌謠の書を蒐集してある事は、本書の私に誇りとするところでもある。

◇かゝる叢書を刊行せしむる機會は、再びあるまいと思ふので、校訂に於ては出來得るかぎりの嚴密を期したつもりであるが、蒐集の書の大部分に質義の個所が多く、大概は闡明あらしめたが、猶不明のところも少くない。それはかゝる書にありがちな事であるので、原本の儘にしてある。この事たる、甚だ遺憾であるが、據らない事と豫め御宥恕を願つて置く。

大正十年九月十八日

藤澤衛彦識

日本の俗謠

解説

一、二葉松（一卷）

明治六年、しのぶ庵主人の編するところのもので、徳川時代の末より、明治初年にかけて江戸に行はれた、主として花街の俗謠を集めたるもの。明治十年三月、櫻川幸八の寫せる正本には、彼の書入れたらしい多くの俗謠も見える。此寫本、後年、山岡子爵家の藏本であつたを、其縁者高野氏の手を経て、編者の藏本にうつる。原本には頗る多くのばれ唄があるが、刊行にあつて、それらの多くを略いた。

二、年々大津繪ぶし（一卷）

近江國大津の町で賣られた大津繪は、昔から禁厭まじなひの護符として用ゐられた。大津繪節は、その繪の、げぼう大黒、雷、鷹匠、藤娘、盲目めくら、鬼、瓢箪、鎗持、辨慶、矢の根五郎等を取り入れ、小唄にして謠つたもので、それにより大津繪節の名があるやうに、「守貞漫稿」などは言つてゐる。弘化年間の出版になる「よしこの戀の湊」の序文によると、『去年の伊豫節今年は古び、今年の大津繪來年はすたる。』とあれば、恐らく弘化三四年頃から流行したものであるらしい。流行唄の短き生命を序した「よしこの戀の湊」子の豫言は當らないで、大津繪節の流行は續いた。それは兎に角、其大津繪節を集めた版本「大津ゑぶし」(弘化版)以下、「新版大津ゑぶし」(嘉永版)、「言葉入大都會婦志」(安政版)、「大津繪ぶし」(文久版)、明治に於ては、綿屋の横本(七年版)、降つて「開化大津繪ぶし」(明治二十一年版)に至るまで、なほ頗る多くの版本を上梓してゐるが、皆、「年々大津繪ぶし」の粹なるに優るはない。

此書は、流行の大津繪の粹と、その年代特異の大津繪節小唄を蒐集せるもの。編者の藏本に據る。

三、都津地里問屋 (前後二編一卷)

本書は、元祖都々逸坊扇歌の述といふ一流浮れ節とつちりとん並におもしろ節を集めたもので、前編には、東海道五十三驛と題するとつちりとん(三絃の初めに、とつちりとんと弾する故の名)の唄十三を收め、後編には、おもしろ節の唄十五を收めてある。前編のはじめに、都々逸坊の畫像を入れてある。弘化三年刊行の版本に據る。

四、教訓秀雅二十六歌仙 (一卷)

安政四年、大平庵清卿宗匠撰の歌仙集といふもので、三十六歌仙集といへど、實は四十二人の吟調を集めたもの。天保以後よしこのど、一の隆盛を來すや、小唄の民間作者頻出し、次で其宗匠撰者といふものさへ出現した。これ、明

治に於ける萬朝報が俚謠正調風と軌を等しくするもので、大平庵宗匠は、實に、ど、一隆盛時代に俚歌開祖を以て任じたる者であつた。主人名を若本清卿と言ひ、京都の人、澤山人の別號があつた。本書は、教訓と銘打つたものだけ、流石に當代卑近の歌謠は混へてをらぬが、然しながら、それらのもの皆佳作といふべき類のものでは決してない。のみならず、趣のある傑作に乏しいが、又、時代小唄の一傾向を其處に認むる事は出来る。安政五年の奥書ある盧橋舎梓本に據る。

五、當世唆り小唄 (一卷)

徳川時代末期に於ける、そゝり小唄を集めたるもの、八丁堀瀧辨、おなじく東清の小唄本、馬喰町吉田屋の小唄本などの流行小唄を集めたるもの。但しばれ唄の多くは略いてある。有隣書屋藏本に據る。

歌謠 叢書 日本 の 俗 謠

目 次

一	葉 松	一
三	鞠 唄	三
四	上方鞠唄十二ヶ月	四
四	鞠唄かへ文句(二つのかはり唄)	四
六	鳥 追(四つのかはり唄)	六
七	上方鳥追	七
七	松盡し(十二のかはり唄)	七
一二	大盡舞(四つのかはり唄)	一二

十日恵比壽(二つのかはり唄).....	一四
御所の御庭(二つのかはり唄).....	一五
かいあんじ(二つのかはり唄).....	一五
薩摩踊(二つのかはり唄).....	一五
むらさき(四つのかはり唄).....	一六
白引唄(三つのかはり唄).....	一六
枕拍子(六つのかはり唄).....	一七
扇拍子(二つのかはり唄).....	一八
隅田の四季(四つのかはり唄).....	一八
かり宅.....	一九
しよがいなぢさま(二つのかはり唄).....	一九
ゆんべ風呂屋(五つのかはり唄).....	二〇

伊勢音頭このなんでもせ(五つのかはり唄).....	二一
伊勢音頭よんやさそれへ(六つのかはり唄).....	二二
藝者商賣(五つのかはり唄).....	二三
じんく(三つのかはり唄).....	二四
名古屋唄(三つのかはり唄).....	二五
追分節(二つのかはり唄).....	二五
戀のじやうかいな(三つのかはり唄).....	二五
よいとこそうだ.....	二六
菜の葉.....	二六
飛脚忠兵衛.....	二六
ひなぶり.....	二七
こすのと.....	二七

閨の文……………二八
 一中節(三十八のかはり唄)……………二八
 越中節かつら川(四つのかはり唄)……………三四
 二上り新内(九十一のかはり唄)……………三五
 とつちりとん(五十一のかはり唄)……………五一
 十二ヶ月とつちりとん歌(十二の唄)……………六五
 三下りとつちりとん(二つのかはり唄)……………六七
 三下りいたことつちりとん……………六七
 ど、いつ節(三百四十二のかはり唄)……………六八
 佃(五つのかはり唄)……………九八
 佃くせり……………九八
 ついささわぎ佃よしこの(二つのかはり唄)……………九九

佃くづし……………九九
 いよぶし(四十六のかはり唄)……………九九
 伊豫節十二ヶ月(十四の唄)……………一一一
 世の中おもしろ節(十二のかはり唄)……………一一五
 大津繪節(二十のかはり唄)……………一二七
 じゃんじゃかとしてつるけん(十一のかはり唄)……………一二四
 三國拳……………一二八
 おなじく替唄御猪狩……………一二八
 お竹開帳……………一二八
 蝶々とんぼ(二つのかはり唄)……………一二九
 角兵衛獅子……………一二九
 ちよべ(二つのかはり唄)……………一二九

かまくら(三つのかはり唄)……………一三〇
 四季とりどり(四つのかはり唄)……………一三一
 四季の縁(四つのかはり唄)……………一三一
 柳の達磨(四つのかはり唄)……………一三二
 氣儘ぶし(四つのかはり唄)……………一三三
 長きよぶし(七つのかはり唄)……………一三三
 淀の車(三つのかはり唄)……………一三五
 罪な人(五つのかはり唄)……………一三五
 關の地藏……………一三六
 横戀慕(三つのかはり唄)……………一三六
 あふた夜(三つのかはり唄)……………一三七
 苦界の中(二つのかはり唄)……………一三七

めぐる日(二つのかはり唄)……………一三八
 暑さ寒さ(二つのかはり唄)……………一三九
 安藝の宮島(四つのかはり唄)……………一三九
 よしかいなぶし(二つのかはり唄)……………一四〇
 羽織の紋(二つのかはり唄)……………一四〇
 二上り春雨(三つのかはり唄)……………一四一
 相撲甚句……………一四一
 三下り春雨(四つのかはり唄)……………一四二
 八重一重(四つのかはり唄)……………一四二
 仇な笑顔(二つのかはり唄)……………一四三
 川 竹(二十九のかはり唄)……………一四四
 夢の手枕(三つのかはり唄)……………一四九

惚れて通ふに(四つのかはり唄)……………一四九
泣いてうつむきや(二つのかはり唄)……………一五〇

年々大津繪ぶし……………一五一

大津繪節もと唄……………一五二
大津繪節はやり唄(二十三のかはり唄)……………一五二
讀賣大津繪節(八つのかはり唄)……………一六〇
文久大津繪節(十三のかはり唄)……………一六三
流行大津繪節(五つのかはり唄)……………一六七
浪花大津繪新文句(十三のかはり唄)……………一六九

都津地里問屋……………一七五

都津地東海道五十三次(十三の唄)……………一七六
里問屋おもしろぶし(十五のかはり唄)……………一八〇

秀雅二十六歌仙……………一八三

(庭燎の歌その他四十三の近世調小唄)……………一八五

當世唆り小唄……………一九一

浪花さつくりぶし(二十一のかはり唄)……………一九二
假宅大しやりぶし(十のかはり唄)……………一九八
大しやり節心意氣文句(十二のかはり唄)……………一九九
大志屋利橋盡し(十一のかはり唄)……………二〇一
庄内ぶし(七つのかはり唄)……………二〇二



葉

松

豊年じよんさい節(七つのかはり唄)……………二〇三

以上五卷にて

唄の種類 七十三

此唄の数 千六十三

二葉松の序

花に啼く鶯は仲の街の軒に囀り、水に住む蛙は願頭柳の蔭にうたふ。聲みな流行唄ならざるはなし。月のゆふべには妓が化粧の雪かたまがひ、雨の後朝には吸付煙草の雲となる、麗山の床の三ッ布團に、瀧石の堅き契をよろこび、飛鳥川の瀬となるをうらみし、宵の口説の和氣、うれしうおつすと引きよする、ひざ三味線もはや四ツ時過の、隣座敷へ忍び駒、ふるいやつだが、コウ此文句をきなせへと爾いふ。

吳竹のうきふし繁き朝夕も

たうきくらくらせ世の中

しのぶの森のうかれ人

西のみな月

しのぶ庵誌

二葉松

◇鞠

唄 (二上り)

〽一つとや、一夜明ければ賑やかでく、お飾りたてたり松かざりく。〽二つとや、二葉の松は色ようでく、三がい松のかづさ山く。〽三つとや、皆さま子どもたちや樂遊びく、穴一こまどりはねをつくく。〽四つとや、よし原女郎衆は手鞠つくく、手鞠の拍子がおもしろやく。〽五つとや、いつもかはらぬ年男く、としをばとらいで嫁をとるく。〽六つとや、むじやうでたんだ玉章をく、雨かせ吹けどもまだとけぬく。〽七つとや、南無阿彌陀佛を手にそへてく、後生願ひのおちさまおばさま。〽八つとや、やはらい子や千代の子やく、八千代でそだてたお子じやものく。〽九つとや、こゝへござれや姉さんやく、足袋

やせきだもじよろ〜と〜。へ十とや、東福神とうふくじんのかねの聲〜、今うつかねはし
よやのかね〜。へ十一とや、十二日は藏くらびらき〜、おくらを開いて祝ひまし
よ〜。

◇上方鞠唄十二ヶ月

ばれ唄なれば、略く。

◇鞠唄かへもんく(二上リ)

へ一つとやア、一人で氣をもむ娘氣の、あとやさき、人には言はれず胸のうち、さつ
しやんせ。へ二つとせえ、ふとした事からなれそめて、みそめたが、どういふ縁や
ら忘られぬ、きられぬ。へ三つとせえ、見世のやうすを見てはよび、呼びたて、
かならずわすれてたもんなと、いひあかし。へ四つとせえ、宵からこゝに立ちつく
し、待ちあかし、苦勞するの心から、おかしやんせ。へ五つとせえ、いつものと
ころへ文をやり、人を出し、心のせくま、名も書かず、たゞ用事。へ六つとせえ、

むやみな事すりやとゞきやせぬ、それよりも、こゝろなさだめて末ながく、氣をな
がく。へ七つとせえ、なくも笑ふもぬしゆるるじや、おまへゆるる、男の心と秋の空、
かはるか。へ八つとせえ、八つか七つかわからねど、知れねども、もしや來るか
とひとり言、うか〜と。へ九つとせえ、こゝを素人とねんあけて、かねつけて、
ぬしの女房といはれたや、暮したや。へ十とせえ、とても此世でそはれずば、後の
世は、かならずそふて下さんせ、をがみんす。

へ一つとや、一人のお客は屋根舟で、ちよき舟で、船頭二人で大急ぎ、はやがへり。
へ二つとや、深川七場所も飽きました、こりました、おたびに辨天松井町、常盤町。
へ三つとや、見上げた仲町を後にして、わきに見て、今はよし原で苦勞する、心が
ら。へ四つとや、夜晝こがれて待ちました、待ちました、先に實なきや來もせない、
來もせない。へ五つとや、いつも船宿へ文を出し、人をやり、心のせくま、名もか
かず、たゞ用事。へ六つとや、無性にあがるはやまさんと、お店もの、おつこちに

なるような客もなし、人もなし。へ七つとや、泣くも笑ふも今のうち、今のうち、こゝがみこしの据えどころ、おきどころ。へ八つとや、八つか七つか知らないが、しらねども、見直し二上りねすみ啼き、ちうとなく。へ九つとや、九つひけ過ぎ、まだ來ない、まだ見えぬ、まち人かけたが無駄になる、くやしやの。へ十ヲとや、通つたお前もあがれない、なさない、せかれた仲とは知りながら、眼に涙、顔と顔

◇鳥

追 (三下り)

へ海上はるかに見渡せば、七福神の寶船、へ綾や錦の帆を上げて、へ紫檀のろかいに舵をとる。

へ一夜あくれば松かざり、門に羽根つく手鞠唄、へ春風さそふふりの袖、へ鶴と龜との染もやう。

へ蓬萊山に鶴と龜千代萬歳のおめでたや、へ寶づくしや鳥臺の、へ中むつまじくじやうとらば。

へ御湯殿はじめ着そはじめ、へ作る殿方姫がたの、へ梅や柳の色くらべ、春風さそふ戀衣。

◇上方鳥追 (本こし)

へせじよやまんじよの鳥追ひがまゐりて、ましらびもよねつるふく／＼がじやうなら福や徳がまゐりて、へ宿かりさむらへば、殿も榮え榮ふる君も榮えてまします。へ御長者のお庭におとのするはたれ／＼ぞ、右大臣左大臣關白さまの鳥追ひに近衛さまの鳥追、あづまの方には、酒井様に榊原に伊井に本多のとり追ひ、へ松平の御代はばん／＼せいの御繁昌と祝ひおさめておめでたや。

◇松 盡 し (二上り)

へうたひはやせや大黒、一本目にはいきの松、二本松には庭の松、三本目には下り松、四本目には志賀の松、五本目には五葉の松、六つ昔の高砂の尾上の松や曾我の松、

七本目には姫小松、八本目にははまの松、九つ小松を植ゑならべ、十でとよくのいせの松、此松は不老の松にてなさけ有馬の松が枝に、くどけばなびく相生の松、またいつくのやくそくは、日をまつ時まつ暮をまつ、連理の松にちぎりをこめて、福大黒をみさいな。

へ一本目には市村羽左衛門、二本目には仁木は松本で、三本目には三がい松、四本目にはしうかにて、五本目には御免やぐら下、六つ甘味じまみは歌右衛門、尾上の梅幸に菊次郎、七本目には彦三郎、八本目には八代目、九つ小園次はやります、十で訥升も宗十郎、此幕は舞臺幕にて眞氣ありまの若衆が九藏の藝をみよしやと、またいついのやくわりと、引まく常盤津三味を引く、ゑんぎの芝居と花みちかけて大繁昌。

へ一本目にはいさきます、二本目にはにしんの子、三本目にはさんまのはしり、四本目にはしばえびで、五本目には五たうするめ、六つむつの子たかべうを、うるめのいわしにさうだがつを、七本目にはひしこまぐら、八本目にははつがつを、九つ小

ひらめうれてゆく、十でと、うをいせのえび、このしろに、ふぐのうをにてなまこあかえにまながつを、こもちの鮎に、あいなめのうを蛸いかくのやはらかに、干鰯にとびうを車えび、あんこの肴をつるしに切りてめでたいな。

へ一ばい目にはいものめし、二はい目にはにぎりめし、三杯目にはさゝげめし、四はい目にはしそのめし、五杯目には五もくめし、六つ麥めしとろ、汁、七杯目にはひえのめし、八杯目には蓮のめし、九杯目にはくこのめし、十でとほくの栗のめし。

へ一番目にはいきな客、二番目にはにくい客、三番目には騒ぎ客、四番目には酔うた客、五ついつものいやな客、六つむしやうに騒ぎ客、七番目にはひつ、こい客、八番目にははでな客、九つ小言のたえぬ客、十で床せくやぼな客。

へ一本目には池田勝入齋、二本目には丹波五郎左衛門、三本目には佐久間玄蕃の頭、四本目には柴田修理之進、五本目には後藤又兵衛、六つ昔は草履取、尾州の産にて筑阿彌子、七本目には賤が嶽、八本目には狭間合戦、九つ小牧長久手で、十で豊臣

四白と、ことごとく世界をしづめて智慧がありまの御名將、こゝろは天にのぼる勢ひ、又いつくは朝鮮と、緋緘鎧にくり毛駒、いくさと加藤と蛇の目のしるしいさましや。

へ一本目にはいきな顔世御前、二本目には庭の松をきる、三本目にはさぎ坂まいなひ取り、四本目には城わたし、五本目には強慾鐵砲定九郎、六つむだばらはやまりて舅のお供をいたします、七本目には飛脚寺岡平右衛門、十でとんちの天川屋、此人はまれなる人にて忠義ありまの儀兵衛とて、心もそろふ四十七人、またいつくのかたきうち、目を待ち、時まち、暮をまち、連理のかねのひゞきと共にいさましや。

へ一本目にはいなな原、二本目には二年竹、三本目にはさらし竹、四本目には四方竹、五本目にはごま竹や、六つ昔は在原の業平竹や吳竹の、七本目にはしちく竹、八本目にははちく竹、九つことしの若葉竹、十でとよくの御代の竹、此竹はむりやりの竹にて、幾世おもひの竹の色、ちとせを祝ふ女夫竹、そのすゑくゝの添伏は、

や竹におもひの竹いふて、ふたまた竹のちぎりをこめてめでたいな。

へ一本目にはいその梅、二本目にはにしき梅、三本目にはさかえ梅、四本目にはしだれ梅、五本目には五湖の梅、六つ昔の葛錦に紅梅殿や臥龍梅、七本目には七つ梅、八本目には鉢の梅、九つ小梅や零れ梅、十で飛梅つくしがた、此梅はちとせの梅にてさかえさかふる梅が枝に、ひらけばかをる軒の梅、さてかすくゝの花の兄梅、鐘梅室の梅鶯宿梅に、ちぎりをこめてめでたいな。

へ一本目にはいもせ菊、二本目には錦菊、三本目にはさつま菊、四本目にはしだれ菊、五本目にはこがね菊、六つ昔は紫の、高麗菊や吾妻菊、七本目にはしもよ菊、八本目には濱にしき、九つ小菊を植ゑならべ、十で十日の菊すまふ、此菊は百夜の菊にて、なさけざかりの乙女菊、くめどもつきぬ八ちよ菊、またいつくゝと重ね菊、白菊八重菊かむろ菊、みやま菊のながれを汲みて、菊慈童めでたいな。

へ一本目には絲櫻、二本目には庭櫻、三本目には櫻がり、四本目には志賀ざくら、五

本目には御所ざくら、六つ昔は九重の、深山の櫻八重櫻、七本目にはしだれざくら、八本目には初ざくら、九つ小櫻植ゑならべ、十で外山のおそざくら、此花は、名所の花にて、今も吉野の花ざかり、風にはなびく入相の花、またいつくと夕ざくら、ひざくら夜ざくら朝ざくら、墨染櫻にちぎりをこめて、小町ざくらめでたいな。

一本目には色紅葉、二本目には庭紅葉、三本目には櫻もみぢ、四本目には四つ紅葉、五本目には戀もみぢ、六つ昔は龍田川、みむろの紅葉花もみぢ、七本目には下紅葉、八本目には八つもみぢ、九つ小春のそめもみぢ、十で遠山うすもみぢ、此紅葉やしほの色にて、登りも小倉の山もみぢ、手折れば袖に散りもみぢ、またいつくと氣をもみぢ、ひもみぢきもみぢ村もみぢ、流の紅葉にちぎりをこめて、高尾もみぢめでたいな。

◇大

盡

舞 (二上り)

四海の波もおだやかに、おさまる御代こそめでたけれ、サアホ、大盡舞をみさいな、

そのつぎの大じん、そもくくるわのはじまりは、弓削の道鏡勅をうけ、はじめてくるわをたてられる、くるとはお客の來るゆゑに、わはやはらぐの心にて、くるわとなづけそめにけり、サアホ、大盡舞をみさいな、そのつぎの大じん、そもく五町のはじまりは、ゑんり江戸町ふしみ町、二上りひくは二丁目の、こそくせつは角町で、花のしん町うちすぎて、こゝぞ賑はふ京町を、どつとほめてはどうみればサアホ、大盡舞を見さいな。

そもくお客のはじまりは、こまもろこしは存せねど、いま日本にっぽんにかくれなき、紀の國文ざにとめさす、どんす大じんはりあふて、三浦のきてうを身うけする、どんす三本もみ五疋、綿の代まで添へられて、揚屋半次へおくらるゝ、二枚五兩の小脇ざし、今は半次が寶物、ホ、セイ大盡舞を見さいな。

そもく太夫のはじまりはア、秦の始皇のみかりの時、にわか大雨降りきたる、帝みかどは雨をしがんと、小松のかげによりたまふ、ときに此松しんくと枝をたれ、

葉をならべ、木の間すき間をふさぎつゝ、雨をもらさぬいとくにやア、松を太夫となづけつゝ、松と竹とはめでたけれ、ハアホ、大盡舞をみさいな。

へ清少納言がよまれたる、春あけぼのとはおもしろや、なん／＼たるすがきに、かんたる買ひて衆は、はなをかざりてはづかしや、よせくる廊はどんどめく、いづれどんどや鷺の首、えりを長くしてぞめくにぞ、太夫格子も繁昌に、さんちや梅茶も賑やかに、もんし／＼と呼子鳥、たつきも知らぬ山口三浦の大銅壺、コノつゝこむちろりのかんばやし、それはすみ町のめいぶつ、セイホ、打つたる太鼓の音もよし、打ちおさめたる御代もめでたし。

◇十日 惠比壽 (三下り)

へ十日惠比壽のうり物は、はせ袋にとりばち銭がます、小判にかね箱たて烏帽子ゆではすさいづちたばねのし、さゝをかついで千鳥足。

へさておやまの身の果は、内海やかをかしまやか鴻の池、うけ出すそのまゝ奥様と、

いふたらよかろがそりやならぬ、やつぱりくるわでのたれじに。

◇御所の御庭 (二上り)

へ御所の御庭に右近のたちばな左近そのサ、サ、サ、くう／＼たら／＼。

へ右大臣左大臣、サ、サ、緋の袴はいたる官女／＼た／＼ち。

へ◇か い あ ん じ (本てうし)

へれみやしやんせかいあんじ、まゝよ龍田の高尾でも、およびないぞえ紅葉がり。

へあれ三日月の青すだれ、ちよと送りのさんばしで、かせにさそはれ螢がり。

◇さつ ま を ど り

へ月の八日はお薬師さまよ、薬師まわりのあるその中で、ちらとみそめし大振袖よ、どうであの子にやしのばにやならぬ、しのびそこねたもしその時は、ながい刀できりりようとまゝよ、サマテンレツ／＼。

へ内のかゝ見てよそのかゝ見れば、立てば引臼すはれば牡丹餅、あるく姿は鍋蓋の化

物、サマテンレツ／＼、せけ／＼／＼とんがらし、一貫三百十しんまい、これ
しこ出してもまだ××ない、糠に釘打ちやお前の意見、豆腐に鋌しよりがなア、せ
けばつたのほうしぱり、どゝいがどんならどゝんがどん、サマ／＼テンレツ／＼。

◇むらさき (三下リ)

／＼かはづ啼く、野中の清水ぬるけれど、田毎の月は浮氣じやと、あけくれおもふてく
らすえ。

／＼紫の、ゆかりの色やかきつばた、そめてなまなか物思ふ、あけくれあんじてくらす
え。

／＼早乙女の、すげ笠白き一文字、女ごころの一筋に、あけくれおもふてくらすえ。

／＼世の中に、義理ほどつらいものはない、ほれてなまなかよく／＼と、あけくれあん
じてくらすえ。

◇白引歌 (二上リ)

欠

欠

へかへしともない今朝の雪、ふり込められて朝直し、たが中立で此やうに、つもりつ
もりてふかくなる。

へ来たといはれて嬉しさに、かゝり次第の上草履、おもはず階子も飛んで下り、うた
の合圖でねすみ啼。

へけさも衣もなげすてゝ、やめよとすれどやめられぬ、やつぱり地ごくの道びきで、
ごゝろの鬼が身をせめる。

へ今はたがひにうやむやで、送る月日のおもしろや、とはいふものゝ其内に、ひよん
な心がでなきやよい。

へきれて仕舞へば身のためと、いふていけんをしたわしが、いまは此身がはづかしい、
しあんの外とはこの事か。

へふとした事でちうりまい、脚絆かふがけすげの笠、なかの松原たゞひとり、へ笠に
ばらりとかゝりしは、雨かとおもへば松のつゆ、へまたもや袖にかゝりしは、つゆ

かとおもへば我涙。

なせか今宵もおそいやら、まけたかかつたか知らねども、かてば勝つとていろぐるひ、女郎や藝者にあだ惚れて、まけりやわたしをくるしませ、ほんにやるせがないわいな。

わたしが少しのかりたかね、かいせもどせと一の谷、平山武者がにらみても、かりたかねならかいしやせぬ。

つとめする身のあさましや、誠もうそと疑ぐられ、せじになみだが出るならば、さえた月夜に雨がふる。

ぬしをかへしたその跡で、まくら二つに身を一つ、右も左も夜着の袖、どちらむいても寝いられぬ。

髪もみだれて手枕に、寝入りし男の顔ながめ、いとしくらうさせまする、かんにんしやんせとめになみだ。

かさね井筒にあるとほり、たとへまくらはかはすとも、かならず妻子のある人に、二世のやくそくせぬがよい。

こぞよりことしは深くなり、きのふにけふも増す思ひ、身にも親にもかへたぬし、あかねわかれをするわいな。

わたしはにくうもあろけれど、此子はかわゆくないかいな、寝てもさめてもうつゝ、でも、とゝさん呼んでと泣くわいな。

◇とつちりとん(本てうし)

思ふ男のお聲はせいで、あがるお客の面憎や、悪洒落かねびらきいたふう、するはたらふく酔ひたふれ、夜あけにふいと眼をさまし、チョン／＼、手を打ち若い者、おれが女はどこにゐる、鳥が啼いてもまだ來ない、なんぞとじぶくる聲ばかり。

行こか惠方の妙見まゐり、龜戸天神普賢さま、きね川薬師にあづまもり、つる土手すぐればすだ堤、ちよつと一ぱい大七で、ほろ／＼きげんの出來心、見返り柳に招

かれて、舟は竹やか大急ぎ、岡本さして急ぎやす。

へ雪はしん／＼もう来る時分、思ふお方の聲はせいで、來ずともよいのにきざ聲で、あんまはりのりやうぢ、このちくしやうめ悪いところへ寝てうせて、鼻緒はふんぎる膝はする、犬にあんまの大小言、をかしき中にも駕籠の聲、あれこそおまへと待つてゐる。

へ義理も世間も何かまやせぬ、あくまで惚れて惚れぬいて、あきらめられぬが身の因果、ゆふべ別れて又今宵、逢ひたくなるも戀の慾、お顔ばかりが見たさゆる、ちよと一筆やりましやう、文におもひをふうじこめ。

へ主は浮氣に鯖なまりぶし、わしは堅い土佐節で、色のだしにはつかはれぬ、花のおかゝにかゝれては、二度のうまみに出しかけて、かゝほんさん、ひとりせいいてい、かゝとつちんからりんとかゝなさりや、なんとかゝやんれかゝおかゝはどうでもあじなもの。

へよしや吉原おまへの心、どう品川と此頃新宿まことに氣がもめる、顔が見たのうそと三角ゆるゑに、なほも戀路が市兵衛町、さて赤坂の心から、谷中も根津にこのように、うつら／＼と松井町、しん地らしいぢやないかいな。

へ戀の掛橋流る、川を、渡る大橋兩國柳ばし、永代するの世までもかはらぬ二人が仲のはし、互ひのしん橋うちとけて、二つならべし枕橋、別れの袖のなみだばし、あふせを昨日や京橋松やばし。

へい菱紅梅四筋に芝翫、ぎおんまもりに鶴菱や、茶屋で眞氣のつみものは、引幕水引花やかに、手打連中やほめことば、何をさせても大當り、羽をのす鶴の威勢よく、これぞやく者の氏神と、その名も江戸中成駒屋。

へ生れ故郷は下總國よ、名僧智識といはれたる、清水寺の清玄は、ちらと見そめし櫻姫、戀しきまゝにほつきして、やぶれ衣にやぶれ笠、山家の庵にせぢこもり、ゑがきし像をうち詠め、一目あひたや櫻姫。

へこゝに吾妻のきて町の名に、聞きて鬼もんのかどやしき、かはら町とて油屋の、一人娘のおそめとて、うちの子がひの久松と、忍びくゝの寝あぶらを、親たちや夢にもしらしぼり、ねが油屋の娘ゆゑ、××××のうちから××さるゝ。

へわたしがお客はばつちおすき、いつもかつばでなりはりつば、煙草入もんばでななかつば、玉は丹波でうちやばんば、下駄がいてうばで足はちんば、わたしがおくばでそして目つば、おまけにそつばで氣がてんば、こつば野郎のくせとして、りつばにはつばとつかひます。

へ親の因果か前世の業か、とかく浮世がいやになる、おやぢやすぐ焼き、わたしはみだれ焼にてくもりがち、つかまひどころも無き身にて、せつばつまりし手のうちは、つかもとまでも骨折りて、錆を落して刃をつけよ、なんでも人には手を下げ緒。

へ西であそべる極樂よりも、二朱であそべる地獄へは、みんなお客がおつこちる、さてもしやう塚の婆さまが、手びきで奥二階、酌はさんづの慾の川、娘は程よく舵をとる、

とる、お客に××を××××せ、××來る人を××まする。

へ抑も目出たい植ゑもの盡し、天上人は雲の上、猫の色事屋根の上、夏のすゞみは舟の上、こもかぶりは橋の上、茶づけ茶碗は膳の上、ぬしのかんしやくさけの上、これからなだめて床の上、それからそろく××の上。

へぬしが九藏にわしやなる故に、成田屋さんへ願かけて、はやくめうとに成駒や、玉さに似たる高麗藏を、ひしやくをかぞえて松島や、すゑはどうせう訥升と、花橋に菊次郎、嵐吉あらしきちせずと下にゐて、ひざとも團藏するがよい。

へぬしは蕾のサテ花川戸、手くだ合圖の吉原で、京町かねてこなさんを、江戸町かけて裏茶やも、やうくさがしつきとめて、これで心もすみ町と、一寸茶やから揚屋町、今宵大門わしやうれし、ゑんは盡きせぬ五丁まち。

へ末はめうとにサテなり平と、かたくちかひし中の郷、ぬしの來るのを待乳山、あふて話をいほ崎と、無理な口舌を首屋の松、一寸見染めしみめぐりの、しゐの木やし

き隅田川、ほんに人目のせきやにて、まゝにならぬで氣がもめる。

へゑんのはし場がサテあるならば、すゑは妻じやとまにうけて、末の末迄そうせんじ、ぬしは秋葉のうす紅葉、まつにこんめと聞くもいや、あふて別れてうし島の、わざとなげたるまくらばし、中直りして大橋と、うれしの森や梅やしき。

へぬしの來るのをわしやまぢかねて、一夜逢はねばぐちになり、逢ふてどうしてかうしてと、寢るも寢られず物案じ、うかれがらすも思ひ草、逢へば怨みもうち忘れ、下になる手のじやまになり、髪も化粧も寢みだれの、恥かしいほどうつなき。

へたとへしうとが鬼でも蛇でも、惚れたお前の親ぢやもの、あくまで添はふと思ふのぢや、それにお前はなんじやかじや、わたしやとうからめうとぢやと、ゆびをりかぞへてたのしみぢや、さあ相談ぢや、よめ入りぢや、祝儀ぢや、目出たいぢや、盃ぢや、座敷が引けぢや床入りぢや。

へつくやくつくくサテ船がつく、舟にや櫓が付くかいが付く、評判芝居にや木戸がつ

く、ゐざりのきん玉にや砂が付く、旦那お出でにや供が付く、ともの腰にも辨當つく、辨當のあとから犬がつく、しつくとりつくくらひ付く、くらひついたらあとがつく。

十一月

へひらの暮雪にさてことならず、げに八朔のしら重ね、雪のはだえに雪を着て、くるりくくと茶屋まゐり、ふるひつくよな風俗を、大盡連がこれを見て、雪ころがしをいたさんと、むつごとつもる床の内、それからにわかにかよひます。

十二月

へことしの暮とかさしていひながら、氣樂な人のくるわうち、是でも暮と思ふやう、うは氣おまへがとしわすれ、淺草市だの煤拂のと、して夜毎に青樓へ、かまはずふけるむす子をば、内では餅についてゐる。

へもしも此子が藝者衆の子なら、河東上下江戸袴、めかすは石町延壽さん、仇でまよはず岡本よ、いやみのないのがかたもちかう、さらりとうまいが長うたで、すつとすまして一中ぶし、いまにかたるがさくら草、残らず覺えて藝者となる。

へ獨暮しのさて其氣らく、いつも安宅でまくらじし、かねに怨みは石橋も、老松過ぎの春駒は、七草過ぎて羽衣を、正札付でうり拂ひ、よし原すゝめの揚代も、そしておまへにかへさうと、あつちら向いて舌出し三番叟。

へ若しも此子がせんだの子なら、棹が三年ろが三月、ならはせおいたそのうへで、仇な深川送り船、時に昨夜の子供衆は、だんな如何でありやした、あれはよつぼどきりやうよし、ことに手どりでありやした、そんなら今晚うらなじみ。

へ若しも此子が肴屋の子なら、鯛やひらめやかな頭、ほうぼう黒鯛こちまぐろ、あじに戀路を石もちや、しやけをのんではぶりいひだこ、いわしておいてわらさでのかれいは、にさいのくせとして、きいたふぐなやらうだと、いつてもまけぬははつがつを。

へ深川七場所女のふうは、どん／＼さわいであすびよき、やぐらの子どもにかぎります、ひり／＼とからいはしんちのこ、威勢のよいのが石場の子、ほどよき裾の子どげ

しの子、ばた／＼するのがあひるの子、つん／＼するのが仲町の子。

へいろのいろはおしへるよりも、あぢないろはのいろ男、お半におしへた長右衛門、石部とやらのきまくらが、しんに二人がにひ枕、ぎりある中とはしりながら、わすれかねたるこひの道、浮名を流す桂川。

へ琴や三味線こきうをすらせ、あこやごうもんせめ道具、岩永どのも御聞きあれと、そちと景清なれそめは、尾張の國よりはる／＼と、野山を越えて清水へ、夜毎夜毎にかちまうで、ちよいとしぐれの傘も、おやすい御用でありやした。

へ風にからすのしるしをつけて、あるきながらもしぶうちは、こゑもす／＼しくはり上げて、本家からす丸枇杷葉湯、これは皆さん御ぞんちの、毎年毎としごひろうを、申し上げます暑氣拂ひ、御上りなさいさあ／＼と、いきせきあせふきまうします。

へ唐と日本の出世のかゝみ、されば太閤秀吉の、素性を聞けば其昔し、國は尾張の中村で、夏の夕立ちや稻妻が、そりやこそがら／＼びつしやりと、おへそをめぐがけて

光りやす、雲のすき間をふみぬいて、家根や木のえだきらひなく、そこらあたりへ
おつこちて、こしのほねを、ぶんぬいて、大坂町の名倉でちよいとなほる。

へこはい所へ桃太郎さんが、ともに猿犬雉子までも、團子一つに命がけ、くんずほぐ
れつた、かふて、赤鬼角までうちをられ、黒鬼青鬼うちしをれ、どうでもかなはぬ
御免なさい、大將めかして高上り、たからをもたして此場たち。

へ唐と日本の忠義のかみ、されば大星由良之助、主人のうらみをはらさんと、四十
七人より出して、師直館へみだれ入り、玄關しば部屋中らうか、なんなく炭部屋へ
おしこんで、首尾よくかたきをうちとりて、その名はほまれのかな手本。

へ隅田の葉ざくら名を都鳥、四方の青田をみめぐりや、牛の御前の名にめでて、のろ
け咄しを夕立や、長明寺から木母寺へ、酒が過ぎたかちどり足、ころぶ所はいざさ
らば、ゆる、といふも口ゆるゑに、きかくは土手でかさをかり。

へ花のお江戸に又無いものは、大名衆の軒ならべ、紫しかけを左づま、五丁まちにて

八文字、花ぼんしやんの向見ず、むやみに威張る神田つ子、火を見て集る白魚は、
やぐらでどんとかしらづけ、ありやりやんわいとものいろは組。

へ花の三月彌生のはじめ、十軒店に尾張町、山の手かけて糺町、五人囃子にこきん雛、
はだか人形や大張子、周月玉山玉たまぞろひ、鬼ごつかうではなければ、目かくしし
たる雛ひな様は、手の鳴るはうへうれて行く。

へ思ひくのゆかたをか、へ、はいる門より番頭さん、おや、今日はおひねりの、
わつちや忘れたどうしやうね、歌さんゆんべはおたのしみ、いえ、そぢやない梅
川さ、それでもおまへの大噂さ、そかいつたらよろしいつておくれ、をか湯がぬる
い番頭ばんざうさん。

へ富士の裾野に曾我兄弟は、いともさつきのやみの夜に、たいまつてらしそこかこと
狩場めがけて忍び行く、本望遂げたその上で、頼朝一太刀うらまんと、奥の間さし
てかけ行くを、どつこいやらぬと後から、とめたは御所の五郎丸。

駕籠をかゝせて北野や七兵衛、來かゝるところへいな川が、胸のもや／＼さつぱりと、わが家をさして戻り足、關取けふは出來ました、花やつた旦那どの、こゝにじやと垂れを開ければ、わが女房、言葉いな川どの、なんにも言はぬかたじけねえ、するぶんまめでいやしやんせ。

來るとそのまゝ、大高いびき、はじめはかうではなかつたが、どうした事か此頃は、酒がかうじて此しだら、妻とさだめる女房に、こんなにこんなに寝られてなるものか、だるまをせんじてのませうか、それでは寝ないでこまるだろ。

いたこ出島はさて色どころ、客はりつぱに氣はさつば、腰ざしもんばになりよしの、しやれた顔してよしなされ、夕べもこよとてたまはだの、今宵もこよとてたまはだの、折々しがない御無心に、さつぱりあいそがつかました、ごみとり手桶にちんちろり。

里は根岸のさてわび住ひ、ひねつたかきねに鶯が、聲も長閑な春がすみ、引けや三

味せん忍び駒、いきな河東や一中ぶし、うたふ蛙やほとゝぎす、物しそやかにしんとして、かすかにてらすあかつきは、さけで寒さをしのがんせ。

びんと心に本錠おろし、鍵はおまへに渡しおき、わが妻ばしとなるからは、堅い約束石原や、よいながかうの女夫いし、嬉しいぬきの齒を染めて、腹にはしめしいはた帯、ただの薬師ぢやないゆるゑに、秋葉となつて下さんせ。

ぬれに來た身の此身ぢやものを、ふられて歸るはもとよりも、百も承知の床の内、呑めやうたへやそれひけと、調子はづれの聲出して、ひとり自慢のどゝいつや、ところへ藝者の仇聲で、どゝ一うたはれ大へこみ、ふられはせずにてらされる。

一夜あくれば廓のけしき、常に憎みし鳥の聲、にくうおつせんはつがらす、内へむけたる松かざり、これからお客を松の内、うつりが残す梅の花、客はにつこり福壽草、常にふられしやりて衆も、笑ひがほするみつの朝。

心うはつく彌生のはじめ、仲の町ふう景は十軒店にことならず、いきたひんな籬を見るこ

こち、これはくくと夕櫻、日もくれなるの色ざかり、客もさけくく花もさけ、櫻の花はちらないで、お客は花をちらします。

へひらの暮雪にさてことならず、實に八朔の白小袖、雪のはだえに雪を着て、くるりくるりと茶やまはり、ふるひつくよな風俗を、大盡たちがこれを見て、雪ころがしをいたさんと、むつごとつもる床の内、これからにわかに通ひます。

へいきな姿をさて來てみなと、人をこそつて北の國、げにや和朝の女護が島、すみだ河原は何のその、すみだ川でもながれなら、此川竹も流れの身、さてもすゞしき八文字、かほどに清き風俗を、なせどろ水といふだらう。

へ牽牛織女のさて星祭、北の里なる二つぼし、七夕さんではなけれども、さゝに一夜を呑みあかす、左右の茶屋を眺むれば、玉菊さんの來る夜とて、みな茶やくくの思ひつき、さてもりつばな燈籠は、とぼすとりもちする故か。

へ神無月とはさて言ひながら、いつもにまさる五丁町、縁を結ぶの福の神、大黒さんじやあるまいし、大あなすきの御みと、うちでの木槌はなけれども、おほくの寶をまきちらし、あひたい見たいといふ鯛は、さゝとのゑびすにつりこまれ。

◇十二月とつちりとん歌

へ一夜明ければさてゆたかなり、去年の鬼が袴はき、御慶申すと門にたつ、はねつく音や手鞠歌、二日の賣物寶舟、山川白酒干海苔や、あるひははらひ扇箱、きはものあきんど正月も、まう半分につづりかけ。

へ人のきさらぎと吹く梅の花、ぶんとかをりし梅の花、それで心がうきくくと、稻荷祭をかこつけて、みめぐり稻荷を横になし、橋場の渡しうち渡り、袖すり稻荷をあとに見て、とんだ狐にひつかゝり、穴つばいりと出かけます。

(三月唄は、ばれ唄類似ゆる、略く。)

へ生れながらにさてお釋迦様、上と下とへ指をさし、上のお指はほとゝぎす、下のおゆびは初がつを、てつぺんかけねどうつて行く、まけぬはづだよ名がかつを、烏帽

子魚だのなんだのと、人がくらゐをつけるゆゑ、土佐國ではぶしとなる。

△あふて嬉しきさて柏もち、しつぽりあつた月かと待つて夜を更す餅のはだ、なんぼさみだれ月ぢやとて、しつぽりぬれて來るもあり、ふられて歸る客もあり、菖蒲はついて床の内、こひにのぼりはあるなれど、しやうきはひとりも見えませぬ。

(六月唄は、ばれ唄類似ゆゑ、略く。)

△牽牛織女のさて星祭、屋根を五色に染直し、竹に一夜の歌盡し、振にあはれぬ天の川、逢ふほどなきのよひ事を、これであはぬといふ事は、けん牛織女もうはの空、ねが文月の事ゆゑに、秋が來たのと見えまする。

△月の名所はさてさらしなに、四十八谷うつる月、その月ならで武藏野の、月に縁ある吉原や、月見にむすこは札をかけ、團子のやうにまるめられ、今川狀ではなければ、ども、兩しんむすこに氣をもむは、さて仲秋なかあきでは是非もない。

(九月唄、十月唄は、共に、ばれ唄類似ゆゑ、略く。)

△わしもくと鷺明神へ、遊山半分淺草の、たんばにみつる人の山、縁起縁起の賣物は、たうの芋にかしうだま、熊手のおたふくひつかつき、ほど吉原のおたふくを、かうもことしのゑんぎとて、戌のまちまでぶんながし、

(十二月唄は、ばれ唄類似ゆゑ、略く。)

◇三下りとおつちりとん

△立てし屏風のもやうは獅子よ、あがるお客の鼻が獅子、しがみ火鉢の足が獅子、おやぢア越後でかくべ獅子、長唄なんぞは枕獅子、相生執着獅子、田舎のあねさん立つて小便。

△生れ故郷はしのぶの里よ、清水寺の清玄は、尊き僧と呼ばれしが、ちらと見染めし櫻姫、破れ衣に破れ笠、さんやの奥にとち籠り、ゑがきし姿をうち眺め、どうぞ逢ひたや櫻姫、ま一度逢ひたや櫻姫。

◇三下りいたことつちりとん

へいたこ出島はさていりどころハイヤハ、ほんしやをりはしたか燈籠、おんばさんの小便なが小便。

◇ど、いつぶし

へ猫にやまた、び泣く子にや乳よ、すねるお客にや床がよい。

へ札を立てたや此町のかどへ、浮氣御免の高札を。

へなにをうろ／＼はて下にゐや、おれも男だ胸にある。

へよしや川邊のわしや花いかだ、こがれあこがれ日をおくる。

へ浮氣鶯梅をばよそに、泊りあるきの桃櫻。

へかんだうされても三味線まくら、おやのばちかや三下り。

へあのやよしつねさんは、めつそふに身がるな義經さんで、舟を一さう二さう三さう

四さうひよい／＼と八さうとび。

へふつと目がさめ拍子木の音がするから、こいつはまたどこぞに芝居でもあるかと出

欠

欠

へやけだとやけだかうなるからは、親も主人もむかふづら。

へ厚き御恩にまた御意見は、聞入れましたがきればせぬ。

へかげでのろけるそのかひもなく、あへばたがひにぐちばかり。

へ思案中ばに空飛ぶ鳥は、にげてそへとの辻うらか。

へ梅を見て松にとまりしあの鶯は、今となつては飛ばれない。

へせんのしよ手ぎりうらにもこずば、なまじこがれもせまいもの。

へど、逸うたはせ辻うらひくも、ぬしの心が知れぬゆゑ。

へ奥歯でぎり／＼前ばでせじを、いふもおまへのあるゆゑに。

へ啼くなにはとりなきやるなからず、啼くもその夜の客による。

へおもひ丸太ならしやちでもすむが、てこでも動かぬ戀のみち。

へすいたから惚れたがどうしたどうなるものか、はてさ思案のほかちやもの。

へけふはとりわけあひたうてならぬ、日々におろかはなければども。

へやばならかうしたうきめはしまい、するが身をくふふしあはせ。

へひよんな此町にせかいが出来て、うれしながらも苦勞する。

へびんのもつれは枕のとがよ、けふのつかれはぬしのとが。

へまゝになるよでならずにあるは、これちや出雲でもめるだろ。

へもめるはずだよ氏神ちがひ、さぞや出雲でしにくかる。

へ此先にどんな櫻がさかうとまゝよ、わたしや此木にとゞめさす。

へあさいせでさへ漣が立つ、深くほれ、ば腹が立つ。

へ骨が砂利でも添はねばならぬ、あすはなはめにかゝるとも。

へさけでものんでうきくしやんせ、氣から病が出るわいな。

へたてよくの月日はたゞで、たつなくの浮名たつ。

へながい年季を口やくそくで、親にゆるさぬつまさだめ。

へ酒はこさゝでおとなしさけよ、茶わんざけにはだれがした。

へわたしをくるしませてつきあひ遊び、ぬしの友達や義理しらす。

へちゑもない子にちゑつけさせて、きれさせようとのわるだくみ。

へさぎをからすといつたがむりか、さぎといふ字もすみでかく。

へつねくそなたに言ふではないが、朝のわかれにやきげんよく。

へお名は申さぬ一座の中に、命よあげたい方がある。

へ傾城もうそを月夜のあの時鳥、末はだまして空でなく。

へいかに三筋の三味線でさへ、あはぬ其日の音のわるさ。

へ及ばぬ戀とてほれまいものか、しづのふせやに月がさす。

へ三味せん駒をかけてもいひ出すからは、みすちに譯なきや引きはせぬ。

へしまださへ見りやあれかと思ひ、外に島田のないように。

へ遠きにおもんばかりなきは必ず近きに憂ひありとはいひながら、惚れるにかげんがなるものか。

へふさぐ顔人にや見せまい又はたの口、小じやくにあたることばかり。
へふさぐそばから力をつけて、晩くも今夜は来るであろ。
へさけはもとより上戸じやないが、のんでくだまくたねじやもの。
へぎりをかながへ世間をかねて、どうしててつくわに惚れらりやう。
へてつくわ打ちでも惚れまいものか、後架こしかにからみつくのもかぼちやの心がら。
へ油だらけの御守殿あたま、たれがなほした水がみに。
へえんのないのとあきらめもせず、ぐちで出雲の神うらみ。
へもときにまさるうらきなしとはそりや誰がいふた、うら木に實もなる花も咲く。
へ何も時節とあきらめもせずに、ぐちであけくれ神うらみ。
へ仇し仇なし男のころ、逢ふた其時や實らしい。
へひ日毎日おかほを見たが、今ははかなや遠ざかる。
へすやり引きよせ文かきつばた、便りまつ原きくの花。

欠

欠

- ハつとめする身ははかなさつらさ、すこしや察して下さんせ。
- ハらく焼の茶わん見るよなわたしのかほに、ほれたお前も茶人かへ。
- ハさみだれのぬまのまこもとみだれちやるれど、めだつゆかりのあやめ草。
- ハさきが秋風ふかせるならば、わたしは程よく散りざくら。
- ハはおりきせても半天きても、どこかすいたと人がいふ。
- ハ逢ふた初手からみにしみくと、こらへしやうなきなつかしや。
- ハおもふお方の一座が来れば、嬉しながらもはらがたつ。
- ハとしがちがふが女房があるが、ほれたにかげんのものか。
- ハしのをたばねてつくよな雨に、ぬれて来たものがへさりよか。
- ハおもまへがあるゆる用なき人に、あつささむさのせじをいふ。
- ハあひに来たのになせ出て逢はぬ、さほど主人がこはいのか。
- ハおもふ御方はまだ親がかり、こがるゝわたしはかごのとり。

レほうづきはもまれくして中たびされる、すゑはふうふとなるわいな。
レ鳥なきでもしれそなものよ、あけくれおまへのことばかり。

◇佃 (三下り)

レふけよ川かせあがれよ簾、中の小うたの顔見たや。
レさんさ時雨かかやの雨か、音もせずきてぬれかゝる。
レ佃ばしから文とりおとし、水に二人が名をながす。
レしのをたばねてつくよな雨に、ぬれて通ふはにくからぬ。
レつくだくといそいでこげば、しほがそこりでろがたゝぬ。

◇佃 くせり

レ浅草市の買物は、まけたく市やまけた、七五三のかざりかだい／＼か、網に鐵灸
かな火箸、おみきの口か伊勢えびか、はりこのおちんこかるかつた、山椒のすりこ
ぎやおもかつた、金龍山でもあがらんか、浅草名物なんです、はるかむかうを見

渡せば、すつとならびし茶屋の見世、茶屋の女の色しろさ、いろはしろいがほッが
赤い、させそはさせそでくささうだ、橋の上なる殿様は、先のけく／＼わきへよれ、
御てん女中に肴うり、あるひは順禮ふるてかひ、はなしうなぎにはなしがめ、橋の
下なる大茶船、家形屋根船ちよき四つ手、深川藝者に江戸藝者、一中節には河東ぶ
し、富本常盤津はやりうた、ついたかねつきました、ついたら上つて小便しよサア。

◇つゝきさわぎ佃よしこの (三下り)

レ送りましょかよおくられましょか、せめてしん地のはなまでも。
レさみだれの、軒にからみしわしや根なし草、菖蒲刀できれはせぬ。

◇佃 くづし

ばれ唄ゆる、略く。

◇いよぶし (本てうし)

レ五十四帖は源氏の名よせ、君に葵は常夏の、誠を須磨や明石がたには若紫のはづか

しく、こがれこがる、うつせみの、啼くや皐月さつきのみじか夜に、松風夢の浮橋渡るま
ぼろし夜半の月ほとゝぎす。

へ春の遊びにとる源氏かるた、初音ゆかしき梅が枝も、花は源平咲きまじれども、す
こしまけたる紅梅は、花散る里となりしゆるる、小蝶は花にたはむれ、けしき夕顔の
空の薄雲かげろふとくれて行く。

へ戀の源氏も末摘む花よ、ひらく扇は風そよぐ、ならの小川にふねの梶の葉、こがれ
こがる、螢火の、もゆる思ひはよもぎふから、山の煙はさわらびの、もしほにみを
つくして人目の關屋はたそがれに忍ばんせ。

へ宇治の名高きせん茶の名よせ、豊ゆたかのあけぼの鷹の爪、高尾龍門花橋や霜の花も初み
どり、雪の梅とうちとけて、めざす若芽と青柳や、する廣黃菊白菊山本山には薄も
みち若みどり。

へつやく煎茶の名も高き、喜撰くんじゆをなすうちに、一夜あくれば朝日白菊る

がほをつぐるや福壽草、ちとせことぶき屠蘇のさけ、顔もほんのり曙か、揃ふたつ
まもや八重がき松にかゝりし薄ゆきや宇治の里。

へ船で行きましやうすみだ川さして、上野のけしきをみめぐりや、土手の櫻の花はち
らちら、流れも清き都鳥、吹けよ川かせ流し行く、たいこ末社を引きつれて、これ
より花のよし原ひかりかやく夕ざくら花の里。

へ三筋引き出す春霞、禮者勤めの長き夜に、しうぎ長うた寶船、さかえことぶく梅の
春、門に老せぬわかわかと、ふしも揃ひし竹のもと、常盤の色もかはらぬ上には鶴
が舞ひ遊ぶ春げしき。

へ色もまさりし淺草原の、宮戸川原の南無阿彌に、かゝる四ツ手の觀世音なる念佛も、
聞くに馬道の今戸山谷は道つゞき、すみだ河原に待乳山鸚鵡石、土手の夜風で見か
へり柳やこれ申しなびかんせ。

へこれは新川名酒の名よせ、つよい劔菱男山、泉川には四方の瀧水たきずみ、白菊泡盛玉みど

り、宮戸川には萬願寺、七つ梅には三國山、さんごくやまかみやの菊に壽めでたい老松養老酒萬年酒。

へよろづよし原その初會に、みすぢ引出す春霞、うたふ鶯をどる雀に拍子も揃ふた大一座、仇な初夢三ツぶとん、二つ枕の寶船、浪のり舟はぎちぎちと、辨天様が乗合ひで音のよき。

へ縁の鵲渡せる橋で、おまへと二人でそふならば、春野に出でて若菜摘むとも、かたたに出でて賤のわざ、君がためならなんのその、機も織りそろ糸車、深山の木の葉月もる伏屋に住むとてもいとやせん。

へ光る源氏の御幸のすがた、花の夕顔紅梅の、匂ひゆかしき玉かつら、初音知らずや鶯の、君に嬉しき玉章は、結ぶ揚卷ふぢばかま、綾の錦は乙女の姿しをらしく花の里。

へ稻穂拾ふて雁金二つ、女夫くらすか中たんば、土手の夜風が標子もれきて、山谷で

かすかに紙きぬた、たそや行燈の影ふけて、玉姫あたり狐火の、ちら／＼と見えつかくれつ引け四ツ過ぎから問夫の客あがらんせ。

へ逢ふて嬉しきよい柏餅、あまりおまへのきのえから、わたしや氣の毒、思ひまはせば、ひのえも水にこがれつく、願ひかのえしその時は、つちのえうまで主のそば、なんのかのといはりやうと、みづのえ他人じやあるまいしそはしやんせ。

へ花は上野か染井のつゝじ、今日かあすかと日ぐらしの、君に王子の狐穴から、いろはの女郎衆にまねかれて、うつら／＼とだいて根峯のみがはり地藏を横に見て、よし原五丁まはればこれもしお客さんあがらんせ。

へ闇の夜でさへよし原ばかり、月夜なりとてこのさとへ、植ゑし櫻の仲の町には花魁道中八文字、客を待乳の山風に、袖の梅が香酔ひさまし、人目を忍ぶ軒端に問夫は勤めのうさはらし戀のさと。

へこれは世間の女房の名よせ、妃さまには政所、まんどころ北の方には御臺様やら奥様御新造御

内室、おかみさんにはおうち方、かゝあさゑもん内のやつ小指に、夫婦げんくわをする時は、ひきずりおたふく山の神。

へ四十八組一番名よせ、すいたすかぬのその中に、いきない組に通ふ神田は、西と東に別れても、中をよ組にするがよい、離れぬは組は源氏車火がかりや、に組當番五組揃ふて飯田町江戸の花。

へ四十八組二番の名よせ、め組大勢花やかに、す組かうとうで、ろ組せ組は人も知つたる伊達な組、わけて百千仲のよい、も組の人足百八人に火がかりや、纏揃ひさつても見事な鳶の衆江戸の花。

へ江戸で名高き役者の名よせ、一に成駒八代目、いきな彦さに勇み肌なる音羽や、濡事宗十郎、今のおやまは榮三郎、その次しうかに菊次郎、座元は勘三郎市村さても揃ふた河原崎みやしやんせ。

へ君をまつ蟲わしやこがね蟲、なかぬ螢に身をこがす、人のくつわで首尾も玉蟲、馬

おひ蟲のやるせなや、どうこほろぎ夜あけまで、やぐにもたれて鈴蟲の、みのむしまでも戀しくやつれはてたよきりぎりす啼きあかす。

へ今も昔も名はかはら町、聞いて鬼門のかど屋敷、ひとり娘の名代ものとして、内のこがひの久松と、忍び忍びの寝あぶらを、とけて逢ふ夜の睦言は、おやたちや夢にもしらしぼり、戀ゆる名までお染とは人もいふと。

へ今度二丁目の所作事六歌撰、しうか小町のうつくしき、座元業平あとは歌右衛門、僧正遍正黒主に、文屋康秀きせん法師、新内ちよぼくれ歌念佛、あねさん本所かへ、島田かなやは川の間とまらんせ。

結びそめたる苦勞の種子も、二人ねじめの楽しみに、どうかごげんもあらば、今宵はかへすまいとの忍び駒、胸は三筋が四ツの鐘、とけてぬる夜のうれしきに、もはやあれさしのゝめ渡るからすのうらめしや癢のたね。

へ江戸によし原廓のけしき、袖をつらねて衣紋坂、ちよいとみかへり柳ごしなる姿に

見とれてうかくと、軒をならべし茶屋の數、夕暮てらす仲の町、全盛みさを立て
がさ花魁道中花やかにみやしやんせ。

へ日本橋からなかばしかけて、廣い江戸ばしその中に、おまへ一人にをとめばしとは、
わたしや心の一つ橋、それに筋かひなんとしやう平、あんじ暮していづみばし、あ
けくれ神田橋をば祈る永代さめが橋すきやばし。

へ伊勢にふる市泉州に乳守、こゝに駿河の二丁目まち、京に島原にはの新まち、人
も知つたるはでなさと、身には墨染撞木町、肥前長崎丸山に下の關博多みくに、な
にしあづまに五丁町江戸の花。

へ都名所の數あるうちに、わけてやさしきやせの里、思ひあふたる小原女の、たきッ
に花ををりそへて、いともやさしき賤のわざ、よしの初瀬の花よりも、都ぞ春の錦
はほんに揃ふたこゝのへを見やしやんせ。

へものゝ名さへも所でははる、おなじことなるものながら、京で辻君大坂では惣嫁と

となへ、あづまには夜たかといふていやしめど、あはれ身すぎのたねなくて、よな
よなせにをつかみとる買はしやんせ。

へ伊藤松坂ないしやうは、三井八丈丸やに水口や、あひの命やまかに白木布袋や嶋やにゑび
すや住吉や、岩きさんには近吉よ、ふとりに裏地は松坂や、近江屋伊豆倉澤のゐに
大丸だいまるかけ値なし、これまうし買はしやんせ。

へ聞くも勇まし木遣りの名よせ、はやしこぐるまぼう車、さかたかけすばたうたいし
わり日光おひかけねんだい、きえしにくろがね五尺手拭白酒じやうないあふぎやり
おく車、よびきりおくまに中ちゆうまにかるゐざはきりをぶし江戸の花。

へうそじやごんせぬさて本所の、いつも五ツ組いさぎよき、けしに花咲くみどり町に
は十ヲに一つもまけぬ氣の、とちも菊月十三の組、威勢は十四かはら町、でがあり
やかぎをかさねて十五の組も北組と勇ましや。

◇唐と日本にその名も高き、光りかッやく大星が、まれな忠義を假名手本なる、だい

ぢよは鎌倉八幡宮、兜あらためとりさばき、それから見染めし顔世ゆるゑ、忘れぬ事のおこりは胸に、ゆみも鶴が岡戀のよく。

〽慈悲は少々もない師直が、慾にもものゝわかざりなき、としは若さがこらへくゝて明日の登城にどうしてと、待ちに松なる鉢植ゑの、枝をおろしてお見事に、あそばせ武士のいちらしや、といふのもそのばのおもてむき早使。

〽門に吹き來るあの巢籠りは、誰も子ゆるゑに迷ふ身の、留めしお石のありし事とは、夢にも二人は白髪之首、進上もうすき表から、力彌がやりにかゝるのも、一間をあけて加古川本藏ぢやらうと大星がほしをさす。

〽おもき忠義にお輕が身をば、請出さうと大星が、飛びちがひたる大騒ぎとは、手の鳴る方もわきまへず、おのが心いちくらむゆか下忍び入り、石燃籠のあかりをてらして、様子の文を讀む二心。

〽かはす言葉を忘れねばこそ、登名瀬小浪は二人づれ、胸はせまれど廣い世界に夫婦

といふはたゞひとり、供を便りにはるくゝと、なれぬ旅路もその人に、やがて大津

や三井寺の、麓を越えて山科へ着きにける。

〽今にさかいのあみ町人に、武士もおよばぬ立引に、さりし女房のにのこす吉松を、見るに飛立つ大星が、諸士の身の上かさゝぎと、渡りを頼む天川屋、心もほんに合言葉、名さへも忠義の儀兵衛とはたのもしや。

〽怨み積るとたれ白雪の、中をふみわけ面々が、天よ川よと合言葉、うちこはしたる大騒ぎ、儀兵衛も力の手揃ひで、うへからどつさり大石で、おしつぶしたる淺野の茶漬の菜の物こりくゝと。

〽門に若松の三春のけしき、萬字さかえし丸龜に、いきな稻本かよふ金屋に朝日ひらく平扇、玉屋そろひし彦太泉屋、さても美し姿、海老屋笑顔のこぼれ松葉や咲くも揃ひと櫻屋も江戸の花。

〽花の江戸町に其の名も高き、揃ふ玉屋の小紫、君に大鳥長尾よそおひ、見るに染衣

葛之助、結ぶ初糸若みどり、かをる立花花の香や、入り来る客も繁浦を待つ千代春半太夫三代の春。

へならぶ江戸町二丁目の名よせ、山とから國玉くしの、中に若菊佐川代々照豊本瀬川に瀧川の岸の姫松相生の、枝も繁浦常盤木や、しの原みさご管原高橋政壽美豊浦や代々の春。

へ月も角町その色里に、ひやく瀧川倉之助、よせる浦波たれを松島中川たえぬ浪の戸も、渡る瀧橋都越や、ならぶその菊龜菊や、松人君は愛人賑ひ吾妻に國人や花のさと。

へ色の都のその京町に、大井重岡立ちならぶ、かをる姿野ゑがく錦繪、いづれも揃ふた玉の江も、佐川瀧川豊浦や、初音にのぼる金山や、大里かよふ若人つきせぬ眞砂のかぎいなき葛かつら。

へつやく京町二丁目の名よせ、千本櫻木宮川や、かよふみちのく直江すゞ岡、瀧川色綾雪之助、鶴代龜菊喜瀬川や、戀のます山金屋歌川大井佐々浦、金女は代々衣玉照や峯の春。

へ伊勢の戻りの石部宿で、かたいおまへが手をとりにて、はでないろはの浴衣染かや氣をもみのきれ、色にてられしはづかし初枕、それから旅の夢うつゝ、坂はてるゝその馬士ぶしにおこされて旅の空。

◇いよぶし十二ヶ月

へ一夜あけたるその年はじめ、女夫二葉のまつかざり、三河萬歳禮者双六、寶船には神いさめ、内へ舞ひ込む大神樂、お顔につこり福壽草、恵方のかたへ向ひたる、拍子をそろへて七種をたゝかんせ。

へ王子まゐりと皆かこつけて、笛や太鼓ではやさされて、とんだお穴へうかゝと、通ふ女人にのろくなる、呑めや騒げやそれじやけれど、宵にはどんく大騒ぎ、夜中に姿うしなひまた狐めがばかすとぐちをいふ。

へ垂枝櫻でもう春雨に、ぬれてほころぶ娘氣も、ませた恨みをいふてじれだす、さいの事に角を立て、それをぐづくにひまくら、桃の節句もわるじやれに、ころんで硝子を××れてそろ／＼白酒を××かける。

へむかう鉢巻手にかぎもつて、いつもかはらぬ鯉魚とも、ゑぼし魚ともいふて賣り來る、勇み肌なる江戸ツ子を、べん／＼草にのせて行く、もう生娘もいろめ立ち、そろ／＼卯月頃だに、さて×××××稗蒔が××かゝる。

へ堅い起請もさみだれ月に、しやう氣うしなふ戀のみち、主にしみ／＼逢ふた嬉しさ二世も三世も神かけて、深いえにしの仇枕、ほんに心もふきながし、互ひにのぼりつめたるしやうぶついたる睦言は床の内。

へ心浮き立つ天王祭、さゝの機嫌で氣を勇め、日吉山王名高き祭禮、どん／＼かつかの猿鶏で、渡る拍子もうち揃ひ、太鼓三味線太夫衆、年番をどり屋臺に、てこまひきやりでねり込みは江戸の花。

へとしに一度の七夕さまよ、儘にならぬは身の因果、心盡して書いた起請は筆に思ひをふみのぶん、かへす／＼のくり事は、笹に五色の色紙も、玉ちる露にぬる夜は、ふりにあはれぬ天の川つらにくや。

へ月の名所みはさらしなの、すいた薄のその中へ、水にちら／＼うつる田毎は、ころさえたる峯の月、はれてあはれる十五夜に、月がとりもつ秋の夜に、初戀のむすめ月見は、むつごとつる床のうちはづかしや。

へ思ひこめたる此巻紙の、返事菊月文のつて、いきな小菊の顔は白菊、つまをかすかずかさね菊、色と美し紅菊に、そまる黄菊のえにしへは、心もちらぬ乙女菊、姿やさしきかむろ菊しほらしや。

へ日々におまへのお顔はみれど、はれてあはれぬ身のつらさ、えんを定める色の出雲へ、むりな首尾して大社、むすめえにしは神さまへ、きせいかけたる戀中も、人めに關のあるゆるに、ほんに二人はまゝならぬ浮世じやえ。

へわしもわしもとみな行く中に、遊山半分淺草の、さても美し花の顔見世、役者揃ひに玉揃ひ、四ツ手のほどよし原へ、通ひなれたる土手八丁、つくりし衣紋坂には、今宵大門しつぼりととりのまち。

へ暮は淺草觀音様よ、群集ぐんじゆなすこと人の山、縁起きつせ競ふ千兩箱から百兩包にみしだ金、柱かくしや熊手つき、姫松かざりに福俵、弓はま羽子板や、金のついたるおちんばこ買はしやんせ。

へ松にはのぼのぼの夜明けて春は、七十ばかりの婆さんが、屠蘇の嬉嫌で手鞠羽根つく、殿様奥様さんしよさま、門にかど松扇賣、双六おりばにかど禮者、もの申す石部金左衛門、年始の御祝儀申しますおめでたや。

へ四方にめぐりてゆかりの色も、門に松竹わかわかと、梅もかをるや初音一聲、朝日でそよぐ福壽草、一イニウ三イつくばねの、雪の化粧富士びたひ、笑顔に似たりさんや堀、寶船こぐ姫はじめ音のよきかな。

◇世の中おもしろぶし (木てうし)

へ野邊の若草つみすてられて、土に思ひの根を残す、世の中やうきにしやんせ、このおもしろやア。

へたんとうれてもまたうれぬ日も、おなじ機嫌の風車、お客大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へおまへへつたい竈かまどわしや火吹竹、はやくふうふといはれたや、出合大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へ浮氣男めどうしゆらぼうき棕櫚そうじゆ箒、どこもかしこも掃きちらす、色事大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へ富士の山さえ雪降りつもる、しんに寒いといだきしめ、お客を大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へ井筒にかけたるあの繩釣べ、ながくみじかく用を足す、出あひ大事にしやさんせ、

このおもしろやア。

へいとゞ思ひはわしやますなれど、はかりがたなきひと心、はかりを大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へ晩に忍ば、裏から忍べ、おもてくゞり戸で音がする、出あひを大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へおまへ庖丁わしやまいた俎よ、きるにきらぬ身の因果、世の中大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へなにか知らねど堅炭がおこる、上じや土瓶が口小言、おさんを大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へびんぼ徳利はもとより承知、中のむまいをたのしみに、世の中やうきにしやさんせ、このおもしろやア。

へ風の吹く日にや傘はさせぬ、むりにさしたら骨がをれ、亭主大事にしやさんせ、このおもしろやア。

へあれ見やしやんせ月雪花を、其角嵐雪くの世界、世の中うきくしやしやんせ、このおもしろやア。

(このほかに、なほ十數首のばれ唄あれど、略く。)

◇大 津 繪 ぶ し (二上り)

へ正月は松竹しめかざり、年始の御祝儀と年玉投込んで、陽氣な聲をして、御寶道中双六、二日は初夢姫はじめ、萬歳が素袍着てまじめ顔、才藏がおほ、らほんのまつちやらこで、恵方まゐりのはで姿、鳥追がちやらくお獅子がとつびきび、白酒羊羹やうかん肩に風呂敷拂ひ扇箱、十一二日はお藏を開いてめでたく祝ひましょ。

へ此頃のはやりもの、よし原五丁町、毎日大繁昌、をかした聲をして、砂糖入金時、大神樂に中屋の坊や、どんつくくどんべに友のみ見せん假面踊り、新造に年増がぢやらく、お茶屋をするのが藝者衆に、櫻六七八おやいやでんすよ、いきなお方

の野暮づくり、くはせもの烏居のあんどん稻荷さま、おらんだ輕燒せんなり糖にか
いわり辻うら茶飯にあんかけ豆腐。

へ藏前のきいた風、ちよんまげ薄月代ほそ眉毛、めし物は藍縞で、羽織は小紋に限り
ます、更紗の煙草入に四ツ目筒、ばら緒の雪踏でめかします、十けん扇を腰にさし、
やぼけん長唄淨るり聞きかじり、きいろな聲を出して、めえりやす参りやしよ、ど
うもならねえエヘン。

へ仲の町夕げしき、軒をならべし茶屋の數、惣まがき交り見世、そのほか數多の遊女
みせ、内證でがらく／＼鈴の音、見世すが、き地廻りそゝり節、藝者がじやら／＼鳴
物入れて見世を引く、長唄一中河東ぶし、六七八拂つてございの、かいわり辻占と
ういんもみ療治、火の用心さつしやりましやう、二階をまはりやつしやいましやう、
もう引けすぎとお客様が眼をさまして時を數へカチ／＼。

へ兩國の夕涼み、軒をならべし茶屋の數、楊弓にうちは見世、そのほか數多のあきう
ど、川の中のかげ芝居、玉やと鍵やのはで花火、ポウン／＼あがりや橋の上には數
萬の人の聲、玉やむしうり麥湯に西瓜のたちうり、しやらしや川こひ氷水からす丸。
へ世の中のかたはもの、數多集つて立茶番、よひ／＼が道具方、跋は幕引き、中氣が
つけを打つ、てんぼう三味を引き、そばに聲がうは調子、啞が淨瑠璃かたります、
下座にて三ツ口が笛を吹く、腰抜けが踊り、盲目が見物いたします、その音かげて
べらぼうにをかしかろ。

へ雨の夜に、日本近く寝ぼけて流れ込んだ浦賀灣、黒船うち込み八百人、大砲小砲を
うちならべ、羅紗猩々緋の筒ぼう襦袢、黒んぼうが水そこ仕事、大將分が部屋にこ
もりてまじめ顔、中にも色の黒いじやがたら唐人は、海を眺めて銅鑼めうはちを敲
いて、チンツン／＼きんらい／＼きんあふらい、あめりかさして、もらひし大根み
やげに歸ります。

へ此頃のはやりもの、そのわけだんよはきざな節、兩國の橋際で、天の岩戸のお扉開

もて、くはせもの、苦界くがいで惚うれてやりや己惚うのほれる、しこなしぶりを見るにつけても、ほんに勤めはつらいものネエおまつさん、ほんたうにそうでありますよ。

春風に、びつしより濡れて火がかりも、風烈しうて黒けむり、はなであをられむごらしや、おかゝり乗や頭取が、おろせさげろといはしやんす、こゝが我慢ださげはせぬ、やがて梯子持から纏持、まあ鳶の出世じやないかいな、サツサなんでもおりはせぬ。

世を忍ぶ勝頼が、花作りの巳之作と名をかへて、越後の方へ入り込みしおそばに濡衣つき添ふて、八重垣はそれと見るよりも、勝頼さんでもない人に、たはむれ事はづかしや、濡衣とりもちしてたもや、おつとかしこまりました、ずるぶんお仲立をいたしましよ、そのかはりに、お家の重寶諏訪ほつしやうの兜が盗んでもらひたい。

はなの下二本坊、いふなり次第に入りあげて、腕の名も灸で消し、これからおまは

んの妻じやぞえ、かわゆがつて下されと、ほろりとこぼす空涙、うつむいて顔あげず、かたぎのわたしもぞつとして、金くめんして相談きまつて身受けして、新道こいきに晋請をしたれば、すぼんと逃げられた、バカヤイ。

衣がへ、開帳かけて酒がくゝらす長暖簾、くやゝの朱鞘の長大小、若いもの案内にて海を見はらす市松の疊、三味はづれの小うたひ訛り、くやゝみどもはお床を急ぎます、上草履ばたゝ隣り座敷ホイ、ホイゝホイゝ酔ひざめ水に手をぬらし、煙草の火はなし灰吹叩いて大あくび。

十月のお會式に、講中集り堀の内なる子道、しんゝくつわ音、よどばし名物團子に辨慶あめなべや横町草庵に、妙法蓮華經本第十六と、お堂の近所に近くよれば、數多の男女がお百度どんゝどんゝかちゝと、お祖師様を拜んで歸りには、しがらきのつべい海苔かけ豆腐に、みやげに焼栗枝柿風車に葉わさび麥粉がし。

御無用と聲をかけ、お石は三方目八分、さてさせにくい式なれど、力彌に小浪を添

はせまじよ、舁引手が貰ひたい、となせは喜んで兩腰さし出せば、引手に貰ふはこれでない、舅どの、お首のせて貰ひたい、本藏聞くより天蓋抜き棄て、内へはいる。へ袖萩は垣の外、不孝の罰で眼がつぶれ、景清はわれとは短氣で兩眼かきつぶす、朝顔は戀ゆるゑに泣きあかしたる目なしどり、三味せん手にもち門に立ち、「所は青山百人町、鈴木主水といふ侍は、女房もちにて子供が二人、コイテハ〜コイテハ〜甲州街道でかぼちやがつるんで、せつちんこはして大家がしくじる、」替女さん、そこは明店さ、そでござりまするかチエ聞えませぬぞえほうそ神、そこで替女めが鹽物屋へうるめはないかと門に立つ。

(なほ數首あれど、ばれ唄故、略く。)

◇じやんじやかとてつるけん (二上リ)

へ酒はけん酒いろ品は、蛙ひとひよこ三ひよこひよこ、蛇ぬら〜なめくじでまゐりまじよ、じやんじやかじやか〜じやんけんな婆様に和藤内がしかれて、虎がは

う／＼とてつるてん、狐でサアきなせえ、スチャラカチャン。

ハ酒は劍菱いろよしで、かはり一猪口三猪口ちよこ、お酌はぶら／＼なまけでまゐります、じゃんじやかじやか／＼じゃんけんな仲居はお客様にしかられて、返事ははいとてつるてん、氣をつけてサア來なせまゐりましよ、チョン／＼ガヨンヤサ。

ハ獨樂は源水奥山へ、芝居一幕三幕まく、茶屋を軒々のろけてまゐりましよ、スチャラカチャン、じゃんじやかじやか／＼てんがくや、としま若衆がうかされて、糸の平内とりもちで、返事でサアきなせまゐりましよ、スチャラカチャン。

ハ酒は焼酎花ござよ、かてう日よけにむしやかご、日々に賣り來るなまけすまゐりましよ、スチャラカチャン、籬によし戸をよんで來る、とんと突出すところてん、麥湯でサアきなせまゐりましよ、スチャラカチャン。

ハ三味は爪引き忍び駒、かんは一筋三筋すぢ、ばちは高音でまゐりましよ、スチャラカチャン、じゃんじやかじやか／＼じゃんじやらじゃん、あさまに端唄をのぞまれ

た、ふしもはでくとつるてん、八ッ乳でサアきなせまゐりましょ、スチャラカ
チャン。

へ蟲は蟋蟀こほろぎいも蟲よ、かぶと蟲こそ身おもおも、蟬はみん／＼ながむしやごめんなさ
い、スチャラカチャン、じやんじやか／＼くつは蟲、ばつたが螢にひかられた、松
蟲鈴蟲ちんちろりん、きりぎりすでサア來なせまゐりましょ、スチャラカチャン。

へさても淺草觀音様へ、開帳まゐりが諸國から、大勢ぶら／＼ならんで參ります、じ
やんじやか／＼念佛堂、婆様は子供をひきつれて、こむからはう／＼とつるてん、
おつれもサアきなせまゐりましょ、チヨ／＼ンガヨンヤサ。

へ花の盛りは向島、歸りはひよ／＼夜櫻で、ついぶら／＼と浮れてまゐりましょ、
なんだか／＼仲の町、かむろにお客はみつけれられ、あたまをかき／＼とつるてん、
あがつてサアきなせまゐりましょ、チヨ／＼ンガヨンヤサ。

へ金がかたきで強慾は、呼ぶとおい／＼三聲ほど、小提灯ぶら／＼お先へまゐりまし

よ、トツチン／＼ツンチリトツ、ン、ざんざら／＼やぶれ傘、定九郎に與市兵衛が
ゑぐられた、猪ははう／＼とてつるてん、鐵砲でサアきなせ、二つ玉でめいりやし
よ、チヨ／＼ンガヨンヤサ。

／＼酒はかなべ色ありは、ちろり一調子三調子のむ、徳利ふら／＼くだ巻いてまゐり
ましよ、トツチン／＼ツンチリトツ、ン、大皿に皿はしんなづけて桶に杓子は仲の
よさ、水はびちや／＼おてつるべ、茶碗サアきなせ、かさねてめいりやしよ、チヨ
／＼ンガヨンヤサ。

／＼たけにともなりはまなりは、はいるひとあみびか／＼とまつるお開帳へまゐりまし
よ、トツチン／＼ツンチリトツ、ン、それ三社が／＼狂言は、歌右衛門にみよしや
高麗や、客は来る／＼とてつるてん、三丁目でサアきなせえまゐりましよ、チヨチ
ヨンガヨンヤサ。

(ほかに數首のばれ唄あれど、略く。)

◇三 國 拳 (二上り)

へおまへ女の名でお伊勢さん、神樂がおすきでとつびきびのび、獅子はもろこし孔子様、てん／＼天竺お釋迦様、丸くおさまる三國拳、なんのこつた、しやぶ／＼お髭をなで／＼ぐるりとまはつて一けんしよ。

◇おなじく替唄御猪狩

へおまへお馬に乗つてお鹿狩しんが、突くのがおすきであいたゝのた、猪はもろともかけ出す、てん／＼天下のお勢子様、丸くおさまる三百間、なんのこつた、あぶないお尻を撫で／＼ちよろりと抜けて一ぶくしよ。

◇お 竹 開 帳

へ如來女の名でお竹さん、開帳するのでとつびきびのび、祖師は深川淨真寺、てんでん天を飛ぶとりのまち、開帳あたつて三所みところけん、なんのこつた、しやぶ／＼お腰をなで／＼くるりとまはつて參詣しよ。

◇三 國 拳 (二上り)

へおまへ女の名でお伊勢さん、神樂がおすきでとつびきびのび、獅子はもろこし孔子様、てんく天竺お釋迦様、丸くおさまる三國拳、なんのこつた、しやぶくお髭をなでくぐるりとまはつて一けんしよ。

◇おなじく替唄御猪狩

へおまへお馬に乗つてお鹿狩、突くのがおすきであいた、のた、猪はもろともかけ出す、てんく天下のお勢子様、丸くおさまる三百間、なんのこつた、あぶないお尻を撫でくちよろりと抜けて一ぶくしよ。

◇お 竹 開 帳

へ如來女の名でお竹さん、開帳するのでとつびきびのび、祖師は深川淨真寺、てんてん天を飛ぶとりのまち、開帳あたつて三所けん、なんのこつた、しやぶくお腰をなでくくるりとまはつて參詣しよ。

欠

欠

へからさきの、まつ夜は長し三井寺の、かたい約束石山の、秋の月かは白雪の、粟津にこがる、身はうき船の、せゝに堅田の片思ひ。

へはるゝと尋ねてこゝへ紀伊の國、岸打つ浪のみくまの、詞順禮に御報謝、門に立つのをちきくと、なのれぬつらさにむせくるなみの、あはれ鳴戸の海のおや。

へ八百よろづの、神は出雲に集りて、えにしを結びたまへんと、つきぬちぎりのつまさだめ、はえある君を縁といのらん。

へくちゝに浮名の立ちし土地さへも、たがひ離れしそれよりは、仲をせかれてくよくと、逢はぬつらさに袖しぼる、まゝにならぬが世のならひ。

へ角力取の、たけき心の劔山、肩ならぶる秀の山、ゆるがぬみよの要石、ちとせ松の常盤山、關の戸さゝぬ國見山。

へ世の中に、かくあさましく身をなして、往來の人も辻君の、袖ふりあふたえにしより、引かれし袖の露しぼる、これも涙のかり寝なり。

へちとせえん、松のみどりや常盤ばし、世にあらそはぬ柳ばし、萬年ばしも榮ばし、
うごかぬ國の神田橋、仇な浮名のわしや龍田川、おまへゆるには氣をもみぢ。

へ雁金の、聲もたがはじ四ツ手駕籠、廓ぞめきの仲の町、紋日紋日の出立に、詠め盡
きせぬ夕げしき、はづかしいではないかいな。

へ引きよせて、音も狂ふ三味線の、通ふ戀路の絲みちも、きれて人目も忍び駒、引
くに引かれぬエ、まゝと仇なる我身に親のばち。

へ山の葉に、心も知らで行く月に、うはの空にてたえやせぬ、それを承知ですご〜
と、わかれのつらさに袖ぬれて、ほんにしん氣な事じやいな。

へふけ渡る、鐘の聲しみ〜と、しんに二人が身の上を、ふりつもる程深くなる、雪
の肌もいつしかに、解けて嬉しき顔と顔。

へ春雨に、夜中わすれぬ手なぐさみ、おさな遊びのえん結び、つい結ばれてにつこり
と、はづかしさうに顔に袖、おさない心のしをらしや。

へ梅が香や、留めてかをりの主ゆかし、顔も紅梅鶯の、いつか音色をたのしみに、初
聲そつと窓のうち、いきな世界じやないかいな。

へ初音聞く、しづが軒端に梅が香と、ともにうつらふ琴の音も、君が戀路のうか〜
と、ひかるゝ裾も春霞、ほんに嬉しいじやないかいな。

へ朝日さす、寢屋もしづけき露の朝、若しざかりのよい水仙と、手折りて見ればそれ
までも、添ふてみたいが身の願ひ、戀のよくではないかいな。

へかはらじと、たゞ一すぢに思ひつめ、勤めはなれし眞實つくす、かない浮氣人で
なし、それとは知れどきれられぬ、エ、モ因果な事じやいな。

へ品川の景色みはらす向ふ地は、はるかむかうに帆かけ舟、中に入り舟そよ〜と、
うかれ曲輪の袖ヶ浦、これも浮世の濱千鳥。

へかはらじと、永代かけて大橋の、兩國ならで一つ夜着、わたしやお前のあづま橋、
しつぽり濡るゝ枕橋、ほんに嬉しい首尾の松。

へみじか夜の、仲をたてきよよし屏風、すゑの夜かけて比翼ごぎ、跡はなんにも岩はしの、神ならぬ身といたきしめ、しんにうれしい縁じやいな。

へ鯉の海、中に乙姫龍宮の、蛸を吸ひ込む客の數、ざしきせましと鯛ひらめ、はしり松魚がつをのしまはおひ、ほんに鰭ひれふる大一座おほざ。

へ逢ふことの、嬉しの森や首尾の松、二人はなれぬ枕橋、秋葉ときけば氣にかゝり、白髭さまへ願かけて、末は久しき女夫ばし。

へ身にかへて、思ふお方に遠ざかり、思はぬお方にしみんと、こぼす涙に白粉の、その顔直して茶碗酒、實にしん氣な事じやいな。

へ春雨に、色香そめたる手なぐさみ、おさな遊びのえん結び、ついむすばれてにつこりと、恥かしさうに顔に袖、娘心のしをらしや。

へ吳竹を、寢ぐらにたどる村雀、鳥をうらやむ心ねに、一年までどもまだ見えぬ、ままになるのをその、松島で、かはりやすさは氣にかゝる。

へいもせ山、うき身をやつすひな鳥の、心飛びたつ山と山、中に流るゝ吉野川、顔見るばかりで添はれぬつらさ、ほんに浮世はまゝならぬ。

◇夢の 手 枕 (本てうし)

へ夢の手枕つい夜が明けて、別れたはこの思ひの煙、思ふ方へと靡き行く。

へ深い仲から勤めの身にも、堅い石場のその約束を、するな洲崎の波枕。

◇惚れて通ふに (三下り)

へ惚れて通ふに、何こはからう、今宵も逢はふと、闇の野道をたゞ一人、先やさほどにも思やせまいにこちやのぼりつめ、エ、山を越えて逢ひに行く。

へ惚れた同士は、なせ此やうに、逢ふ夜をあだにうらみられたり、うらんだり、しんのくせつがもつれてきあれこがねや、エ、しの、めつぐるとりの聲。

へ忍び逢ふ夜は、はてまゝならぬ、人目をかねて、はなす話もあとや先、ついいひ残し、じれてかへしてこちや物思ひ、エ、ほんにやるせがないわいな。

へ忍び逢ふ身は、なせこのやうに、月夜をうらみ、闇になるのを待ちかねて、それ空
夢の、あだにふけ行くあれにくらしい、エ、意地の悪いあけがらす。

◇泣いてうつむきや

へ泣いてうつむきや、簪落ちる、顔ふりあげて、落ちた簪、手でおさへ、あれ痛癢が
つのりく〜て又冷酒を、エ、のめど〜忘れぬ。

へはげたあたまを、どんすりやいたい、顔ふりあげて、打ちしあたまを、手でおさへ、
あれたんこぶのやうにく〜と又はれあがり、エ、どうも〜痛くてこたへられぬ。

右明治十年三月、櫻川幸八寫せる正筆也。

二 葉 松 をはり

年々大津繪ぶし

年々大津繪ぶし

◇大津繪節もと唄

へげほうはしごすり、雷太鼓でつりをする、お若衆は鷹を据へ、塗菅おやまは藤の花、座頭のふんどしに犬わん／＼つけアびつくりし、杖をばふり上げる、あらきの鬼もほつきして、鉦しゆもく、瓢箪鯉でおさへます、奴の行列、鐘辨慶矢の根の五郎。

◇大津繪節はやり唄

へお、い／＼親父どの、その金こつちへ貸してくれ、與一兵衛はびつくり仰天し、いえ／＼金ではござんせぬ、むすめがしてくれた用意のにぎり飯、さよならおさきへ参じましょ、やれ／＼しぶとい親父めと、扱きはなし、何の苦もなく一廻ぐり、いのちと金とのほいない別れの二つ玉。

へ梅にも春はめぐる日の、花の曇りか夕暮に、仇な笑顔に惚れて通ふ、更けて逢ふ夜の一聲は、綱は上意を春雨に書きおくる紀伊の國、宇治は茶所雪は巴に金時が、枯れ野ゆかしきあきの野に、出てかうもりが、玉川の月夜がらすに川たけの、口舌して、むつとして、羽おりかくして我ものは。

へ鎌倉の鶴が岡、足利將軍直よし公は、たづねたもふかぶとあらため、星ときらめく諸大名、我も／＼と登りくる、かぶとのかずも四十七、目利の役目はかほよ御前、花の姿のやさしさに、師直がみ染めて送りし玉づさを、桃の井に見付けられ、むつとして、目に角立て、別れます。

へとしの若狭はたんりよ氣で、鶴が岡でのいしゆばらし、あすの登城にはすつぱりかうしてと、家來賀古川本藏に、様子を咄して聞かすれば、本藏聞いてにはへおり、松の小枝を打落し、いさめる心の一思案、使者にくる力彌に出向ふ小浪こそ、まだ娘氣の後やさき、恥かしながらと顔隠す。

へあひてかはりて鹽谷が難義、師直文箱をおしひらき、なに／＼これは、さなきだに重きが上のさよ衣わが妻ならでつまなかさねそ、よみてし歌は新古今、それからいひだすぞうごんかごん、鮎だ／＼と殿中のけんくわ、判官様はこらへかねてぞ切りかける、鮎といふのも無理はない、もとのおこりはこひの道。

へ扇ヶ谷の上屋敷、名ある櫻をとりそろへ、花は開けどひらかぬ門戸、入りくる上使は右馬の助、つゞいて薬師寺治郎左衛門、上座にならんでまじめ顔、かねてのかく悟と判官様は、無紋の上下もろはだぬいで、こりや力彌、由良之助はまだこぬかところのうち、ほどなく來かゝる由良之助、さいごのかたみと残せし九寸五分。

へてんばつで當る二つ玉、勘平見るよりこれは旅人、なむさんばうしなしたり、薬はなきやと／＼わい中を、さぐりあてたる金財布、みちならぬ事ながら、天道我に與へし金と、無理な道理の分別で、ふところにおさめてかけだす元の道、彌五郎どのにお渡し申す御用金にと急ぎ行く。

へむつまじい夫婦仲も、金ゆるされる身のつらさ、一文字屋はおかるが手をとりにて、むりにおし込む籠の中、もう行きますこちの人、ずるぶんまめでゐてください、かゝさんさらばと暇乞ひ、折から尋ね來る千崎彌五郎原道右衛門、様子を聞いてつめかける、身の言ひ譯と勘平切腹、疵あらためて早まつたとさし出す連判帳。

へ一方の先生は、手のなる方へとたいこ末社、ゆらさんは人の目を忍び、つりどうろの火をてらしよむ長文は、御臺よりかたきの様子こま／＼と、よその戀ぢとおかるは二階から、のべてうつして見る鏡、九太夫はえんの下から覗き見る、いだきおろして顔と顔、うそから出た誠と身請のさうだん。

へはる／＼とながのたび、故郷をはなれて親子連、道もはかどらぬ女のためぢ、富士のけしきも初雪に、今ふり袖の娘盛り、早うお顔が三保の松、小浪が心はいそ／＼と、たへぬ思ひをくみわけて、母親は夫のたましひ二腰をひきで物に携へ、山科さしてぞたどり行く。

へおもてにはこむ僧が、尺八も鶴の巢ごもり、鳥類でさへ子を思ふ、親のよく目か知らねども、十人並にもまさつた娘、つれない心の大石どの、かく悟はよいかとふりあげる、又も吹き出す尺八に、御無用とたんひやうしに聲を掛け、奥より出で来るしうとお石、かへどり姿で白木の三方持つて出る。

へ泉州堺のにぎはひは、諸國荷物の入舟出舟、名も高き天川屋儀兵衛は、鎌倉方のお屋敷へ、送る荷物もかすある中にも、にはかにかつぎ込む長持と、共に黒しやうぞく目ばかりづきんでじつていをふりあげる、儀兵衛は長持のうへにのり、五分でも引かぬ男氣を、見込んで頼みし由良之助。

へ計略の忍び姿、門をかけやで打ちこはし、義士のめんくは亂れ入り、勇みに勇みし仇討に、夜討くとおたがひに、うろたへて下女のおさんはまるはだか、ゆもじ一つでばんぼりをだしかけて、あんどをひつくりかへして、かは××を××れてながれる油だし、××れて××をつく××のじやい。

へつもりくし雪の中、あまよ川よと合言葉、高名手柄のてぞろひで、そこよこよと尋ねあひ、忍ぶ師直は炭部屋の、中より引出し恨の刃、大星はじめ四十七人本望とげる一刀、東天に光かがやくめんくは、ほしのかたみの假名手本、名こそ高輪泉岳寺。

へ仇討でその名も高き、伊賀の上野で渡邊數馬、助太刀は名にしおふ荒木又右衛門、主従四人今やおそしと待ちかける、川井は三十六人のり込み來ればこゑをかけ、互ひに名乗合ひきり結ぶ、中にも竹中星合櫻井ひつしとた、かへど、元より覺悟の四人は、本望とげてその名を末世にのこす。

へかゝるところへ春藤玄蕃鐵ヶ嶽、駄々右門と打ち連れかへる深編笠のさむらひ二人、阿漕あこぎの平治どんは家うちでかへ、聞いてお弓は飛んでいで、この垣一重がくろがねの、使ひはたして二分のこる、一年までもまだ見えぬ、朝顔が、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、回向しやうとお姿を、いくさのかどでにくれぐれも。

江戸の町藝の花、白金あざぶは新内で、常盤津は檜物町、一中なかばし宇治湯島、お藏前は河東節、江戸半太夫はよし原よ、富本は柳橋、清元はお玉が池のかつぶしや、義太夫よしすばり、役者は三丁町、勸進大相撲は回向院。

君の乗るのは御所車、子供衆の持つのが風車、舟で巻くのが帆車で、今のはやいと車、は組は源氏車きやりじやぼう車、引窓でがら／＼なるのがせに車、えんさかほいと掛聲で引き出すは大八車や高輪牛車、淀の川瀬の水車、だまして借りるのが口車。

はいほうかたよれ／＼、これはどなた様のお通りじや、藤原時平公、なんと聞いたか櫻丸、ぞんぶんいはふじやあるめえか、車やらぬど大音で、兄きがつつと咳ばらひ、この松王が引きかけたみ車を、ならば手柄にとめてみよ、時平が睨んで梅松櫻の拍子幕。

この春の吹く風に、世間は五色の色をなす、天水桶が黒くなり、金持地主は雑費で青くなる、家主はおみきの加減でゐろりにあたつて赤くなる、店借は拍子木かちかちおくり番、割竹をがら／＼ひいてねたい目をこすり、黄色な聲を張り上げて、火の用心さつしやりませうとふれて行く。

三味線の鳴りぞめは、糸し皮いに引かされて、こつそりと忍び駒、抱いて音じめの嬉しさも、心ざはりが出来たやら、つらい苦勞に合の手の、今は顔さへ水調子、切れる下地が狂ひ出す本調子、胸は二上り三下り、どうでも一度音色にあはして下さんせ。

三十三間堂の佛の数が、三萬三千三百三十三體あるといふ、庭の石竹根が引き抜きにくい、向ふの細溝に細どじよにより、天王寺たうたう念佛は、十も申せば佛になるといふ、京でなまだら、ならなま眞な勝魚、伊丹いたみのこほり梅土産に買はしやんせ、しようすへいじゆうす、提灯持つてひようしぎもてばまことに打ちにくい、ゆふべの坊主に屏風の表具を持たせて、こんやの坊主に屏風に坊主の繪をかゝす。

へ人の名で人でないものは、茶碗の五郎八に、やけのやん八、三味線の三四郎、神前の五兵衛に佛の太助、あまい薬がかん藏に、若い女が新造で、手水の入れものが半藏で、鮎の源五郎に鯛が金太郎、ゆびの人形が余次郎、風呂のまるいが五右衛門に、きびしよが六兵衛に、渡しが源八、合羽が重兵衛。

◇讀 賣 大 津 繪

へ近江源氏の茶くりうで、茶々木の茶む郎茶か綱は、茶つがしらの茶ぶとを、茶くされて、茶つぼ胴丸に茶のよろひ、駒は茶色で茶びつき毛、茶かくらおいて茶らりと打のりて、茶しはら源太茶が季と、茶がひに争ふ茶きがけは、宇治川よ、宇治は茶所茶屋娘、茶染めの手拭茶にして茶かして茶つくらかへして茶む茶く茶で茶々く茶。

へ六月の炎天、唐人揃ふて船の内、波の上どん／＼水の音、其所めいわく諸あきんど、難儀至極の漁夫舟、なんにもできないそんだい十りやう、浦賀のおきへとちかよつて、あまたの唐人は五百ほど、ハア／＼／＼陸へは上らず歸りには、髭撫でのつそ

りのりかけどうく、みやげはやきめし、おもかちとりかぢ唐へ行く。

へこれは世界の女の直段附、高いも安いも色の道、蜜夫は七兩二分、花魁三步で女郎衆は、一步に二朱にころ寝は四百、きり見世で鐵砲あはすが百文で、もうちつとお安い所が御用なら、おんばさんと子守は先からかり次第、生娘と地色と手切金は相場きまりなし、夜鷹の勤めは二十四文まこと現金かけねなし。

へ狐のお尻がこんげつで、雷さんのお尻はらいげつで、天狗さんのお尻はさらひげつ、それで今月來月さらい月、あまたお尻のあるなかで、手習師匠はものをしり、隠居さんは嗜好きでながつ尻、吉原女郎衆は戀しり情しり、水だう尻、はやくつてよいのが土瓶の尻で、はやくつてこまるのが下女の尻、おんばさんは出臍で大きな棚ッ尻。

へ勸進の大角力、關は小柳鏡岩、やぐら太鼓は六ヶ峯、人の心も一力に、われも／＼と君ヶ嶽、手取りは常山御用木、象ヶ鼻には早雲山、ほかにひゐきは荒馬と、猪王

山、雲龍荒熊階ヶ嶽、飛驒のお國の大男、はじめて白眞弓の土俵入。

〇
へ花の吉原名も高き、お職女郎衆といはれたる、花魁のお國はどこじや、越後の蒲原郡でござります、弟はでんぐりかいつた角兵衛獅子、わたしの親父は水呑百姓、お地頭様へ御年貢がとこほり、金のくめんが出来ぬゆる、わしが身を賣つて、せげんの手にかゝり、ホンネ〜「三國峠を越える時、どした事かのんし、よきはほたら〜、山できしはちよけん〜、おつこちのぎうたか事を思へば」ほんに涙がこぼれたが、今じやお國の風もいや。

へ此頃のはやり物、お臺場仕事の手傳ひに、龍吐水のかざりつけ、茶飲み話の蒸汽船、あめりか茶菓子で夜がふけて、夜番の若い衆はせい出して、藤八五文の拳を打つ、馬具屋に具足師刀鍛冶、陣笠矢の根、早くやりやとあつらへは、矢をつくやうに頼めども、つかへておあひだがござりましやう。

へあめりかをたちのいて、唐人妾が目になてば、黒船に身をちいめ、からの湊や浪の上、風にまかせて帆をあげて、諸々の嶋々をうろ〜と、女嶋へと船をつけ、ながやをそゝりに唐人は、出かけます。投節あれ聞かしやんせ豚の聲、たとへ鼻毛が伸びるとも、女を見捨て、かへらりよか、まはります〜、きり見世女郎衆の口先に、ほらを吹かれて唐人は、から鐵砲もはなせまい。

◇文 久 大 津 繪

へ夕ぐれに、小船で急がして、土手の景色は萩桔梗、露は尾花のうはだまの、あれ見やしやんせ辻占や、まつや簪たゝみざん、ふけて逢ふ夜の氣苦勞は、人目をかねて格子先、男心はむごらしい、口舌して、屏風が戀のなかだちと、けさの雨にかへさりよか、お互ひに濃茶のなかじやもの。

へわしが心は矢ばせにはやる胸、堅い約束石山寺の、秋の月とは氣が知れぬ、かたたに落つる雁がねも、主は唐崎一つ松、ふたつならびさせたの橋、思ひぞ積る比良の雪、ほんに三井ではござんせぬ、せゝゆる今まで逢はずにゐたものを、こゝで大津

の宿なれば、日頃の頼みも京かいな。

へうぬが田へ水をひく、獅子追ひごやで鳴子ひく、芝居では幕を引く、猫めが戸棚で肴ひく、豆腐やが豆をひく、お猿が水をひく、酔ざめが風をひく、女郎衆はお茶をひく、とやでひく、びつこひく、きやうだい車ひく、神田に山わうまつりの花車をば牛が曳く、ヒユウドン、テンテ、テンく。

へてんもん堂、念佛堂、上野にちう堂二つ堂、堀の内祖師堂聖堂經堂かいさんだう、おん藏前ゑんま堂、小日向大日堂、深川三十三間堂、駒形堂やさゝの堂やぐら堂、お彼岸まゐりは阿彌陀堂、ゑんどまめ大師堂、お馬がひんどう、東海道。

へお正月、初日の出、禮者に萬歳藏開き、二月は初午地口燈籠に、三月雛さま白酒にしめ、四月お釋迦さま初がつをに時鳥、五月のぼりに柏餅、六月天王祭、七月七夕天の川精霊まつり、八月お月見、九月菊さけ、十月ゑびす講、霜月祝の子、極月厄はらひ。

へさかづき吞みまはし、堀川與次郎は猿廻し、源水獨樂まはし、なけなしめくらは目をまはし、女房は氣をまはし、藝者衆は取まはし、鎗持尻をふり神主御幣をふりまはし祈りかけ、子供はちんこをふりまはし、役ではじつてい纏梯子をふりまはし。へ盃を思ひざし、船頭衆は船で棹さす、侍は刀さす、かたさす裾さすつれさす、力持石をさす、とりさしは竿をさす、あねさん簪櫛をさす、ぼろさすゆびさすはいをさすふたをさす、お團子しぎ焼おでんにしほやき串をさす。

へ隅田川の名物は、大黒やの櫻餅、大七の鯉こく、しらいはの吸物に、魚十のざつざかな、樂焼梅やしき、あれ／＼秋葉のこいもみち、れんげんじ木母寺いほ崎長命寺みめぐり牛の御前白しげ堀きり菖蒲、あなの鰻あれ都鳥、うゑきやで芋でんがくを蜆汁。

へきりぎりす、時節とて、蟲うりせげんの手にかゝり、江戸町々を籠に乗り、賣られる買はれる勤めの身、ほんに苦界じや苦の世界、胡瓜きつても籠すまゐ、親は草葉

のかげでなく、思ひきり／＼すゝりなく、座敷にて、客につられて夜をあかし、こちれにちれてもまゝならぬ、ほんに此身はせひがない。

〽おうい／＼船頭さん、その船どうぞ早く渡しておくれ、船をさは、ぶつてう面、いえ／＼渡すことはなりません、夜があけたら渡さうと、喧嘩じかけの挨拶に、清姫くわつとせき逆せ、渡つてみせん日高川、飛び込めば、船をさびつくり仰天し、鬼になつた蛇になつたと、堤をさしてぞ逃げて行く。

〽勝手道具、荒神さん、へつつい鍋釜茶釜に火消しつば、火吹竹、摺鉢摺子木、眞魚板庖丁火箸味噌こし、お鉢水がめ手桶に小桶、お玉杓子や貝杓子、しちりん五徳に山葵おろし、膳椀茶碗にどんぶり鉢小皿、平、おつば、ちよこに徳利ちりれんげ、ふたもの湯呑に土瓶鐵瓶やかん炭取茶臺にはくち箱。

〽おうい／＼大かぼちや、砂村そだちか買つてやろ、嫁菜かへ、ほうれんそ、いえいえ枯菜はございません、むかご新午勞、よう／＼けがはへた、あさつきなますでお

さらばへ、山のいも、つくいも、おやいも、葱葉生姜、なんのく茄子も一口に、ゆり運かれぎと、からみの大根ふた股で。

〽十二支の、子はちう／＼、丑はもう／＼車ひく、さゝ藪でがさ／＼虎がすむ、兎はお月様見てはねる、黒い雲に辰が巻く、白い蛇がにょろりと出たら、こいつは又雨が降る、咲いた櫻にこ馬つなく、いさみます、ひつじが紙を食ふ、きやツきやツアが桃を食ふ、鶏こけこう犬はわん／＼てつばうみてにげる。

◇はやり 太津繪

〽正月は、新玉に霞立つ、門に松立つ、二月木の芽立つ、三月雛が立つ、四月八日は甘茶に釋迦が立つ、五月五日に幟立つ、六月ちやんちきちやんで鉢が立つ、七月七夕笹が立つ、八月九月やまぢにけむり立つ、十月は出雲へ揃うて神が立つ、霜月顔見世人氣立つ、しはすは煤掃ほこり立つ。

〽雪の夜に、しつぽりと、すいた同士のさし向ひ、隣り座敷の爪弾を、聞いて見合す

顔と顔、身にはつまされ目に涙、かうもしん氣な苦界じやと、膝にもたれて泣き出す、いつそ殺してくださんせ、ばからしい、死んで花みが咲くものか、いつまでも。
へ一から十まで大津繪ぶし、賣買立つ日を市といふ、馬につけるを荷といふ、女の大厄は産といふ、子供に小便やるのがしいといふ、白い黒いの石をならべて碁といふ、一石貰ふても祿といふ、貧乏人のやりくりするのが質といふ、ちよいと來て人を刺す蟲蜂といふ、一じに讀んでも句といふ、たばこ盆を引きよせて、灰吹に吸がら落せばじふといふ。

へ合卷のあたりもの、たれ白縫の名にしあふ、倭文庫のやさ姿、兒雷也の作意は妙々車、犬の草紙や曙の草紙、弓張月は横ぐしの、おとみ與三が夜語を、筆にうつせし假名反古、白表紙砂子仕立のやた毛刺、千とせかはらぬみさをの松は、摺も仕立も江戸の花。

へねすみ仲間のいふこときけば、猫やいたちとことかはり、もつたいなくも福の神、

大黒天のつかはしめ、それにこのみをなんとする、おほきなほりを手にきげて、「いたづらものはゐないかな」と町々をうりあるく、まゝにも毒がある情なや、棚にはあべかはがあるさうな、これはうかつにや食べられないぞ、きなこがねこになつたじやないかいなア。

◇なには大津繪新文句

へ枕のかずは、さまざまある中に、うたゝね枕にひち枕、西行法師は歌まくら、ひと夜かりねの草枕、旅まくら木枕に、いやなお寝間の長まくら、夢の枕にかごまくら、上あはぬその夜は三味まくら、しん氣やと、とがを枕にあてつけて、ほんにせかいよ好きなおまへの膝まくら。(枕づくし)

へいづくにも、かはらぬものはいろのみなとに戀の山、おもひ／＼にのぼりつめ、粹もぶするも北の新地、出入のふねの夜る晝と、顔はかはりて新堀や、ほつたほりえもかへり花、上そめてふたゝび色かへぬ、九郎右衛門町、通ひ南地のこゝろもそら

に、山さか町もいとはずと逢ひにくるわの四すぢ町。(浪花いろ町づくし)

へぬしのこゝろをはかり升、一合はあふてどうしてと、せかれあはれにやなをつのり、癪にまぎらし泣いたのも、二合や三合の事じやない、そふに添はねば死んで四合と、やくそくかため五合までも、上ほんに六合に逢へりやせぬ、七合のうはさで、八合かゝされたりいけんもしられたり、たとへ合をするとても、かあいおもひはしん實しんから一升忘りやせぬ。(一合より一升まで心いき)

へ一升おまへとすゑながう、二升も三升もかはりやせぬ、四升がどのやうにいほふとも、五升で浮氣はせぬわいな、たとへ六升なくらしでも、七升の勘當うけるとも、八升九升ともおもやせぬ、上一斗はかれりや二斗三斗四斗の異見も、五斗も六七斗も聞いたれど、八斗はおもへど九斗いことじやが一石みゝにも入りはせぬ。(一升より一石まで心いき)

へはんがくは門やぶり、常盤御前は我子のために、貞女をやぶり、政右衛門は關やぶ

り、法界坊は、戀の意趣に一軸ひきやぶり、いやな女は世帯やぶり、爪がながうてかきやぶり、權八はあみ乗物をきりやぶり、上與三兵衛は大膽不敵な鳥やぶり、かげ清は牢をやぶり、……(後略)

へおなじやうに、澤山あるものは、旅の衣はすゞかけの、安宅の山伏に、書きなれぬおなごの文の文句の中のさやう候へば、悟空が吹きだすわがすがた、七まき半まいた百足の足と、禪家の修行にほうゐく、上高くらさんの鳥居か住よしの、石の燈籠、論語の中の子に、氣味のよいほどはしつてきて安治川ぐちにならんだ大きな帆ばしら。(澤山にあるもの)

へきせるの小ごとをきくときは、思案かたてにふりまはされて、しん氣な夜るは、ぶつけられて、しらぬ此身をたゝみざん、とかくつまらぬむねのうち、つまればやたらにはらをたて、たゝきたふしたその跡は、上無理にあたまへきづをつけ、ゆくすゑは、首をどづいてへちやがらし、今はこの身もあめの鳥屋へ引かされた。(きせる

の小言)

へ忠臣大序、兜四十七、二段目松きり本藏御心配、おかる文箱、小夜衣、ふなへに一寸ぬいて大騒動、由良かけつけ城わたし、猪々飛んで出てずどんと大間ちがひ、勘平があいたゝにば、うれひ、上平右衛門が血判加茂川水ぞうすい、富士よめ入、手のうち御無用と敵地の御案内、おそのが髪切や、おしやしやんときまつた手うちをば。(忠臣藏十二段つゞき)

へざこばに立つのが市といふ、仲仕のもつのは荷といふ、赤子の出来たのを産といふ、唐では歌を詩といふ、白黒石を碁といふ、牡丹に唐獅子ろくといふ、貧乏人のやりくりは質といふ、おいどでさすのを蜂といふ、ものあんじ心配するのを苦といふ、朝夕あけたてするのはこれをまた戸といふ。(一より十まで)

へ傾城の、涙で藏の屋根がもり、葛の葉狐が信太の森で、無官の太夫敦盛で、すしやの彌助がこれもりに、手づかに討たる、實盛や、鈴木飛驒守は鷲の森、鯨を捕るの

は一のもり、上不破の關守てる手が飯盛で、寢屋のもり、するのがいやさに身のおもり、成田屋は三すぢにかうもり、お七は泣くく、鈴が森。(もり盡し)

へ逢ふた夜の、むつ言に、心のたけのむすばれて、解けて島田の、あらひ髪、すまぬ口説のうちかけに、すむは今宵の月のかげ、なにをいふにも口ごもり、見合はす顔に鼠なき、上あれ聞かさんせ鐘の聲、見違ふおもふ床の内、またの御げんと泣いて別れた朝がらす。(心意氣仇文句)

へしんきさの、手枕に、おぼろに見える主の顔、夢とはあまり情なや、こがる、胸を書きつくし、見ればぐちなる後や先、苦勞そめたるふでの綾、そめた文句も戀の智恵、上ほんに男は癩の種、かこち泣き涙にぬる、袖たもと、いつかあふ夜とうさをはらした疊ざん。(心意氣仇もんく)

へ道とんぼりの、川竹に、いつも五つの常芝居、繁昌の、茶屋料理屋、講釋輕口ばなしは法善寺、たえず賑ふお午は自あん寺、なんば新地に春夏は、めづらしきこと見

世物に、上折りたる骨をつぐなん波、てつげんや、市中はなれし湯屋料理屋に、藝
者をうちつれ夜あかし居つゝけ命の延しどこ。(南地の繁昌)

年々大津繪節をほり

都津地里問屋

都津地里問屋並おもしろふし(第一編)

◇東海道五十三驛(元都々逸坊扇歌述)

〆御江戸日本ばしサテ七つ立ち、東雲鳥か品川に、川河崎と鳴き渡る、こゝは神奈川
臺の茶屋、サテ泊りには程ヶ谷も、もうあるまいと宿引に、戸塚まつたる旅人は、
大金玉の宿なれば、とまるざしきは八疊敷。

〆あけの鳥にふとめをさまし、藤澤寺の鐘の聲、朝ひらつかも出ぬうちに、いそがぬ
旅とはいひながら、心いそぐ大いそぎ、酒川わたれば宿引が、それおとまりかと
まらんせ、はやいかとまりかよそふかと、小田原ひやうぎで埒あかぬ。

〆四里をのぼりのサテおそろしい、自然とおそろく御關所も、御手形すみで通ります、
箱根休みもそこくくに、三しまへ四里の一ト下り、そろくくとまりにかゝらんと、

ふかいぬまづにおつばまり、飯盛殿にしいられて、あしたはあととはらにかゝります。
〆いきな旅路をサテ駿河路と、富士の山をば右に見て、ほど吉原の宿をこえ、藤川わ
たれば岩淵の、栗の粉餅のみちもすぎ、もう蒲原かんはらもへりかげん、とまりに付いて由
井入りで、あすはとうからおきつ宿、えじりをはしよつていそぎます。

〆口もまめならからだもまめよ、府中でこまる足のまめ、手越てこしにわたる阿部川や、道
のつかれを餅につき、足にかゝつたまりこ宿、ぬらくらと來てとろゝじる、直段も
高きうつのやの、山かけ豆腐のことなれば、岡部どまりにいたします。

〆こゝも名におふまた駿河路の、かの藤枝を後に見て、茶屋の島田に呼びこまれ、御
ちやづけ代も九十川、かたでかちとる川越かはこえも、錢と金谷がほしきゆるゑ、中山たうげ
まつすぐに、日も日坂にかたむけば、こし掛川で泊ります。

〆馬士のうたにてふとめをさまし、金をば出して旅籠代、つりは財布やふくろ井へ、
入れて見つけや身に付いて、大天龍や小天龍、せまいやうでひろい川のは、廣い

やうでせまいはままつを、つゑをちからにたどくと、ころばぬ舞坂で宿につく。
宿の女にサテおこされて、船が今出るいま切や、かほをあら井の宿につき、行先と
てはしらすかの、けふ一日や二川で、それで吉田といふじやなし、宿の女によびこ
まれ、とまりについて御油るりと、夜をあか坂の宿をたつ。

へきのふ藤川サテけふのせに、いきな包を肩にかけ、サテ三味せんの糸道にも、おか
ざき女郎衆、女郎衆くで引きならひ、何かつんくしやんくと、てうし付いた
る旅の空、池鯉鮒はらつて旅人が、泊り鳴海の宿をこえ、ほどよい宿をみやの宿。
金のめぬきを見物せんと、さやへまはりし人もあり、ふねでゆかんといふもあり、
おもかちとり楫様々に、諸國の人を一所へ、みなりの合ひのふねのうち、又うみ山
のはなしして、七里の間ゆめの間に、くらう桑名へふねのうへ。

へはなの都へざつと三十里、たゞの三日か四日市、いそぐな日永じやゆるくと、酒
を一盃合の宿、かの追分をよふよろ、ほどよく酔ふかの石薬師、ふろしき庄野も

じやまになり、つるくとまる龜山や、あすの立ちをば關の宿。

へのぼりくだりのサテ坂の下、馬の驛路やすか山、名にあふ伊勢路と近江路の、そ
うじやさかいの國ちかし、わらちに土山付きもせず、泊りじやないかとまらんせと、
水口ぐちに呼びこまれ、この木枕じやねられんと、宿の女を石部ます。

へ直なみちをばサテ横田川、弓とつるなるやばせ舟、あめにくさつてまはりみち、ふ
りにみられる勢田のはし、膳所金づくにはかへられぬ、これで三里のまはりかと、
大津きやはんを直し、もぐさのできる國なれば、これから都へ又三里。

都津地里問屋並おもしろぶし(第二編)

◇おもしろぶし(元都々一坊扇歌述)(本てうし)

〽九尺間口をかりほのいほで、ふたり氣まゝにくらしたや、しやうばいだいじにかせがんせ、このおもしろや。

〽天のかく山かすみがはれて、夏をしらせる時鳥、世の中やうきにやらさんせ、このおもしろや。

〽らうかばたく足引の音、きく山鳥のそのながさ、女房大事にいたしませう、このおもしろや。

〽富士の高根に雪ふりかゝり、しんに寒いといだきつく、おきやく大事にしやしやんせ、このおもしろや。

〽紅葉ふみわけなく鹿のこゑ、こがれくつつまをよぶ、ふうふ仲よくしやしやんせ、このおもしろや。

〽わしとおまへに鶴のはしが、あつて逢ふ夜のおもしろき、かならずうはきをしやさんすな、このおもしろや。

〽みかづき女かこの天の原、よひにちらりと三笠山、つとめ大事にしやしやんせ、このおもしろや。

〽きせん法師のあの上の句は、所書かとおもはれる、よをうぢやまとたがいふた、このおもしろや。

〽花の色にはついうつりぎな、いたづらごとに目をくらす、しやうばい大事にかせがんせ、このおもしろや。

〽行くもかへるもまたわかれるも、戀のおもにのふねとかご、もうくしんぼういたしませう、このおもしろや。

天のつりふねじやわしやなければども、つれなくきれてははらが立つ、かならずじや
けんにかゝんすな、このおもしろや。

雲の通ひ路ついふきとちて、雨の十日もふればよい、どうなとしゆびしてきやさん
せ、このおもしろや。

戀ぞつもりてさてふちとなる、思ひ積りてぐちとなる、はやくきまゝにしてみたや、
このおもしろや。

人めしのぶのさてもじずりは、みだれそめしもおまへゆる、どうぞみすてゝくだん
すな、このおもしろや。

わかなたつむより嫁なをつみな、君がお爲のさいになる、ふうふ仲よくしやさんせ、
このおもしろや。

都津地里問屋 並おもしろぶし (第二編) をはり

秀雅二十六歌仙

序

されば、世治りて文事起るといひしもむべなるかな、大平をうたふ
さとひ歌てふもの、道ひらきせしもわづか二十年に過ぎず、古より
さとすを元とし、天下の業を助け、月雪花の四つの時、はた人情を
たねとして、末世盡きざる言の葉は、濱のまさこの數多の中より、
この道のすぐれ人を選び、其おもかげのうつしを櫻木にのぼせ、
歌仙の集として、後の世のかた見に匂はせむとす。

安政四年といふとし

大平庵主人誌

教訓 俚道歌 秀雅三十六歌仙

大平庵清卿宗匠撰俚歌名譽畫像歌仙集

京都書林 盧 橘 舎 梓

萬葉俚歌集に

俚節三曲

天の鈿女命庭燎の歌

吟調口傳

あられ降るらし外山のかつら、色に見ゆるをいかにせん。



咲きものこらずまた散りもせぬ、誠ことばの花ざかり。(俚歌開祖大平庵若本清郷

別號 澤山人)

あの世までもと契りしことを、此世からその苦勞する。(梅園里夕)
われが身で身をせめての苦勞、人は恨まじ神も世も。(栖霞園羽峯)

へかねにせかれて心のちるは、夢に咲いたるはなのえん。(洞の家老狐)
へ先のこゝろをしるそれまでは、我をうたがふ我こゝろ。(青柳庵花粧)
へ及ばぬ事じやと氣にあきらめて、見ぬがましらの水の月。(摩々齊夢中)
へ花街のならひとたゞ一口に、まことしらざる人が言ふ。(祇園新地妓婦 來葉女)
へ空寝してまつ人眼の關を、越さぬあいだに鶏の聲。(清流舎公川)
へ月もしるまい今宵の雪は、つもる嘶しのあるさとは。(井上梅雅)
へ水のそこ意の誠をてらす、月もうき葉にへだてられ。(竹園辻江義明)
へけふは誓ひをしてかへしても、翌はかはりし人ごころ。(祇園新地妓婦 鳴村屋ひな)
へ妻戸ひらきて一息ほつと、月にかけたるむねの雲。(牧の舎友芝)
へ戀にこゝろは千變萬化、喜怒哀樂會者定離。(富士舎竹翁)
へ跡にわすれし扇をみれば、ひとの心のうらおもて。(祇園新地妓婦 京屋うめ)

へ思案して見りやみなうそらしい、逢ふてはなせば實らしい。(春亭梅枝)
へうつりかはりし我 俤は、盡きぬ苦勞の一寸鏡。(青柳樓花廓)
へ愚痴や末練は戀路のならひ、粹はあはざる先の事。(華林堂成保)
へきれよくとあまたの人の、口の刃ものにかゝる仕宜。(琴廼家欣京)
へ願を眼先に見るうき人を、思ひ出すほどわすれたい。(舞匠 山の内岸女)
へ華陀のかゝみにうつして見ても、しれぬむかうの心ゆき。(松樹園榮枝)
へまちし此身はやま鳥の尾の、長々し夜をあかさねぬ。(施奥館一力)
へ心あまりてこと葉のたゝぬ、所へ涙がたしに出る。(七夕庵星丸)
へ油ながせし襖も今朝は、あかぬ別れとなるつらさ。(祇園下河原 烏屋本娘今女)
へあふてぬがせた心の笠を、こぼす涕に着てかへる。(湖東八幡 楨園文魚)
へ嬉しい夕邊のながめにかへて、今朝は花から夜がしらむ。(直誠淵思若)
へたのむ一樹にもりたる雨は、袖に一河となるなみだ。(俚歌撰者 柴廼戸朝水)

へ天下泰平の世にたつうき名、人のくちまで戸はたゝぬ。(俚歌撰者 北梅舎文吾)
へそつとさゝれて口どひて見れば、かぶりふり出す風ぐすり。(姉丸更 薰窓軒木の華)

へ花は苦勞の身にさき草の、三ツ葉四ツ葉にもの思ひ。(左海家佳松)

へけふも目先にまよひを見るは、おのがこゝろの影法師。(祇園新地妓婦 榮治)

へこれが人ならうらみやすらん、蚤に喰はれしゆめのあと。(登虎軒拙光)

へひとの誠を墨繩にして、おのが心に引きなをす。(胡蝶亭東園)

へ逢ふたときはの言葉の花に、またもまつ身と成りにけり。(永日庵櫻)

へ狸寝入かかせひかぬやう、着せてやりたい八疊笠。(双蝶園花登)

へ逢ふて氣をもみ別れてふさぎ、それを持病の虫がすく。(似水園似水)

へ千とせふるともかはらぬ人を、まつも常盤の風のさた。(祇園下河原妓婦 今きく女)

へひとをめぐらにして逢ふむくい、いまは戀しい顔も見ぬ。(花橋園龜若)

へ戀のやみ路もよし原ばかり、月夜かなうそ月夜かな。(銘の家鋏)

へ苔や木の葉にうもれし中に、いろはかくれぬ藪かうじ。(四方の家名昇)

へ何をおもてかあのほとゝぎす、人の静まる夜半を啼く。(西村たかえ)

へあかぬ別れのうつり香までも、袖にとゞめぬ朝あらし。(八木園啞丸)

へ直に誠のその近道を、しらで欲氣のまはりみち。(鳥居家玉垣)

へ春のこゝろをこゝろでしめて、見ても花にはさそはる。(日新館御門葉松の舎露月)

安政五戊午夏

發行書肆

江戸日本橋五丁目

山城屋佐兵衛

大坂心齋橋筋博勞町

河内屋茂兵衛

當世唆り小唄

教訓歌道 秀雅三十六歌仙 をはり

尾州名古屋本町一丁目

永樂屋東四郎

京都三條幸町西へ入

丸屋善兵衛

京都御池堺町東へ入

橘屋久兵衛

當世唆り小唄

◇浪花さつくりぶし (二上り)

へあつみサア、にはのとりが、みんなのオヤ、サツクリ、可愛男の目をさます、アア、シャウ〜。

かんらくともなんばん、はたけでやつてくれ、枯木に花が二度咲くか、オヤ、サツクリ〜。

へまつ身サア、殿の歸りが、いつあろさアオヤ、サツクリ、首尾の便りが聞きたさよ、ア、シヨウ〜。

京都安樂すりや、お江戸の繁昌絶えまなし、お米も一升二ごするか、オヤ、サツクリ〜。

へさすがサア、武家の調練、見やしやんせオヤ、サツクリ、揃ふた人数のり、しさよ、ア、

ひう〜とんととんと、劔つけ鐵砲でやつてくる、からにも負けないしやうぞくか、オヤ、サツクリ〜。

へさしみサア、けもの料理は、横濱でオヤ、サツクリ、豚のうしほに小鍋だて、ア、大將どんたくすりや、南きんおけしがやつてくる、洋妾^{らしやめん}おいどに毛が無いか、オヤ、サツクリ〜。

へ辰巳サア、いろの深川、来る客はオヤ、サツクリ、馬鹿のむきみのかひなじみ、ア、

藝者べん〜引く、さん〜×××でつかはせる、やりても花を欲しがるか、オヤ、サツクリ〜。

へ浪花サア、なには進發、姫路までオヤ、サツクリ、勇む徒歩^{かち}武者御しきさん、ア、

奥州仙臺さん、會津に佐竹でやつて来る、お留守居お役は酒井さん、オヤ、サ
ツクリ〜。

ハ諸式サア、諸しき高さに、人へらすオヤ、サツクリ、しわいお方と愚痴をいふ、ア
ア、

身上險約すりや、三度のごせんもやめにして、お米は高さに二度食ふか、オヤ、
サツクリ〜。

ハ阿部にサア、丹羽に藤堂、溝口かオヤ、サツクリ、加賀井伊奥平のめが薩摩、ア、
少將大名衆は、南部に酒井でやつて来る、朽木に立花五島真田、オヤ、サツク
リ〜。

ハ伊賀のサア、いがの上野に、仇討はオヤ、サツクリ、川合又五郎が目ざす譬、ア、
主従かんなんして、三十六人皆殺し、荒木は數馬が叻太刀か、オヤ、サツクリ
〜。

ハ鬼のサア、住家尋ねて、よりみつはオヤ、サツクリ、しゆうじう山伏に身をやつし、
ア、

たんと吞ませろ、酒呑童子酔はせる、強いは劔菱鬼ころして眞紅にしやう、オ
ヤ、サツクリ〜。

ハ主のサア、お顔見はしと、松やばし、オヤ、サツクリ、かたいおやちが女夫ばし、
ア、

無理な小言をきくや橋で、おかほは赤羽しあんばし、そはさずば逃げるが一の
橋、オヤ、サツクリ〜。

ハ弓矢サア、鐵砲西洋、大づつかオヤ、サツクリ、威勢強いのはほらの貝、ア、シ
ヤウ〜。

ふうと吹きや、どんと打つてかゝり、懸引しゆれんでせ、世の中おだやか安心
しやう、オヤ、サツクリ〜。

へ茶摘みサア、宇治の茶つみが、見事さよオヤ、サツクリ、そこで道者衆が浮かされる、ア、

道中かんなんするとも、お金で一番はつてくれう、財布が空からになるとても、オヤ、サツクリ。

へ湯屋のサア、湯屋の湯銭が、十六でオヤ、サツクリ、二十四文のよたかそば、ア、焼酎かんせずとも、けんちんから汁ごつたませ、どぶろく二杯が百するか、オヤ、サツクリ。

へいさみサア、四十八組、鳶の衆オヤ、サツクリ、いよはに組にろせもめす、ア、じやんとばかりか、れば、ありやりやんりうとてやつてくれ、やう火消はお江戸の花じやもの、オヤ、サツクリ。

へ手打サア、手打てうそばは、更科ましろなのオヤ、サツクリ、新造としまのそばがよい、ア、信州しんたいじが、なんばんからみでやつてくれう、四六が二八になるものか、

オヤ、サツクリ。

へ長門サア、お供揃ひが、見事さよ、オヤ、サツクリ、さても中國平げて、ア、京都上洛すみや、ほどなく東へ御がいじん、大江戸に黄金の花さくか、オヤ、サツクリ。

へ芝翫サア、かきつ市村、きのくにやオヤ、サツクリ、九藏あかしや三津五郎、ア、納升のりあがり権十郎に、關三かたきに、成駒や、しうちは彦三か小團治か、オヤ、サツクリ。

へ花見サア、花の盛りは、三めぐりかオヤ、サツクリ、けふかあすかと日暮ひぐらしか、ア、群集ぐんじゆ参詣さんぎなす、元三大師は上野やま、だんなはお駕籠に手をひかれ、オヤ、サツクリ。

へ玉はサア、珊瑚瑠璃玉、りんの玉オヤ、サツクリ、こはい目の玉鐵砲玉、ア、おやちやかんしやく玉、けんじんかね玉、しゆつの玉、人魂屁玉は手にやとれ

ぬ、オヤ、サツクリ〜。

へおなじみサア、まぶの客とは、み上りかオヤ、サツクリ、つらい勤めの年季よます、ア、

内證せつかんするとも、さんたんこんたんやつてかし、かゞみの鞘には空篋筒、オヤ、サツクリ〜。

◇假宅大しやりぶし

へ夏は船、三味は藝者よ端唄は節よ、川はすみ田にエ、とゞめさす、大しやり〜。
へたいこもち、お客むやみにおだて、おいて、戀の深みへエ、飛びこませ、大しやりしやり。

へ兩國の、象は鼻にてお客を入れる、入れぬ湯屋ゆやのエ、早仕舞ひ、大しやり〜。

へ武家方で、はやる訓練まち高ばかま、あねさ島田でエ、ゐなか行き、大しやり〜。

へ由良は義士、お石となせに小浪は嫁よ、むこが本藏エ、とゞめさす、大しやり〜。

(忠臣藏九段目)

へらしやめんも、元は榮華で極樂世界、今は地獄でエ、火の車、大しやり〜。

へひやうろうかへ、田にし梅干梅ぼしおやぢ、女郎かうとはエ、しはのばし、大しやり〜。

へのせられた、お客は浮氣に藝者はかぢよ、いろは船頭衆のエ、胸どころ、大しやりしやり。

へぬかみその、臭い仲だよ權助おさん、むまくしなのかエ、さがみかい、大しやりしやり。

へ年あけば、すぐにゆきます神々かけて、ぬしじやないぞへエ、まぶのそこ、大しやり〜。

◇大しやりぶし心意氣文句

へ人はぶし、花は櫻に、かをりは梅よ、女郎衆はとしまにエ、とゞめさす、大しやり

くくり。

へ一つやぐ、二つ枕で、はなしたことが、どうして世間へ知れたやら、大しやりくくり。

へ駒下駄の、音でなきやむ、あのきりぎりす、又もなかせるとこの内、大しやりくくり。

へためになる、客を勤める、その夜のつらさ、ぬしに枕の番をさせ、大しやりくくり。

へよし原の、あだな假宅、たれしもかよふ、はまり込んだる深川へ、大しやりくくり。

へ千鳥足、一合二合升、ほろくきげん、三合升からふかくよう、大しやりくくり。

へけふあすか、ぬしにあふたの、だうかん山で、娘かは××投島田、大しやりくくり。

へめづらしい、鼻であしらひ、お客を入れる、今度兩國象の評判、大しやりくくり。

へ向島、牛の御前は、鎮守の神よ、馬の御せんは豆がよい、大しやりくくり。

へあさがへり、きげんなほして、すひつけたばこ、胸のもやくわすれぐさ、大しやりくくり。

へ江戸の花、四十八組は、いろはでわかる、戀のいろははへだてなし、大しやりくくり。

へ夕暮に、仇なとしまの、ゆあがり浴衣、ちよつとまをとこしゆすの帯、大しやりくくり、しやりこ。

◇大志屋利橋盡し

へうわさばし、すると端唄で今通町、ぬしにどこやら日本ばし、大しやりく。

東あづまはし、もじをくだければわが妻橋よ、せたい持つ日をまつやばし、大しやりく。
すゑかけて、めうと石とも業平橋の、ほかに思ひはあらめばし、大しやりく。
おやち橋、かたい意見もそのときわ橋、むりな小言ときくやばし、大しやりく。
添ふことも、ならぬ二人が中橋なれば、かみをおろしてびくにばし、大しやりく。
しあんばし、内へ戻るか假宅へ行こか、風にまかせる柳ばし、大しやりく。
わびずまる、とかくしんしやうがたくり橋で、こまる錢龜丸木ばし、大しやりく。
みろくばし、後の世までも添はねばならぬ、戀のかなめの扇ばし、大しやりく。
枕ばし、二つならべてあいそめ橋の、夢の浮橋さめがはし、大しやりく。
小夜更けて、ぬしに大はし萬年橋も、かはるまいとの中のはし、大しやりく。
狂ひ出す、わしが心の駒とめ橋よ、添はれざ逃げるが一のはし、大しやりく。

◇庄内ぶし

浅い川なら膝までまくる、深くなるほど帯をとく、ヨイトくヨ。

酒を呑む人しんからかわい、おみきあがらぬかみはない、ヨイトくヨ。
ひと目じやわる口心でほめて、かげでのろけて知ちぬ顔、ヨイトくヨ。
男しやうなし紙この羽織、もめてやぶれてきたがる、ヨイトくヨ。
なまじ切れずに調子がくるひ、引くに引かれぬ三味線を、ヨイトくヨ。
わたしや鰻か割かる、胸を、きれてこがれてやけになる、ヨイトくヨ。
月になりたや十五夜の月に、團子あげたりあがめたり、ヨイトくヨ。

◇豊年じよんさいぶし

今のじよんさいぶしや何處からはやつたの、ソノコトダンヨ、江戸のよし原の藝者し
ゆの、ジヨンサイコノジヨンサソノワケダンヨ。
わたしや紀のくにみかんのしやうでの、ソノコトダンヨ、女郎にむかれてまつばだ
か、ジヨンサイコノジヨンサソノワケダンヨ。
廊下とんびの絲目が切れての、ソノコトダンヨ、今じや揚げるにあげられぬの、ジ

ヨンサイコノジョンサソノワケダンヨ。
 へあねさ小便すりや八百屋だとおもふの、ソノワケダンヨ、ごぼくちしやツばと音がするの、ジョンサイコノジョンサソノワケダンヨ。
 へ寺の坊さまと色するならばの、ソノコトダンヨ、線香まつこくさいちうがほんのこんだの、ジョンサイコノジョンサソノワケダンヨ。
 へ一かけ二かけてわしや三かけての、ソノコトダンヨ、しかけたいろごとはやめられぬの、ジョンサイコノジョンサソノワケダンヨ。
 へ酒に呑まれて又みめぐりの、ソノコトダンヨ、けんはなまゆいがもちきりだの、ジョンサイコノジョンサソノワケダンヨ。

當世唆り小唄 をはり

日本歌謡叢書 日本の俗謡	大正十年十月十五日印刷 大正十年十月十八日發行		
	◇定價金壹圓八拾錢◇		
不許複製	編著者	藤澤 衛彦	東京市本郷區森川町一番地
	發行者	森清太郎	東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所	印刷者	森清太郎	東京市神田區錦町一丁目十九番地
	印刷所	日本傳説叢書刊行會印刷部	東京市本郷區湯島四丁目三番地

東京市神田區錦町一丁目十九番地
日本傳説叢書刊行會
 電話東京八四四六番
 電話神田三二九二番

◆藤澤衛彦氏編輯解説◆◆貴重なる民間文藝記録◆◆

日本歌謠叢書

民間文學の抜粹ともいはれる民間歌謠の統一的叢書である。そこに個人の特異な傾向は見られないとしても、われわれの共鳴する眞の國民性の表はれである思想感情趣味風尚信仰風俗の純美の姿は充分に其上に窺ふことが出来る。すべてそれは時代民衆共同の聲の代表的なるもの、歌ふて懐しく味ふて興趣盡きざる寶玉の詩である。

永く、文藝の尺度に照して、頗る其最小を哀れまれてゐた日本民間歌謠は、茲に時代の要求として、其純眞なる特異の態を、今古の種々相のまゝに表現せしめらるゝに至る。總じて十二冊、各冊みな貴重なる記録を包含してゐる。

東京神田錦町一ノ一九 日本傳説叢書刊行會發行 電話神田二二九二番 振替東京八四四六番

其天才を啓發されたる霰玉散る小唄の粹也

◆全册是記録體の歌謠史◆

- 日本の古謠 (全一冊) (内容) 傳説時代の歌謠 外邦樂輸入時代の歌謠 内外樂融和時代の歌謠 雅樂圓熟時代の歌謠 雅俗樂分岐時代の歌謠
- 日本の地謠 (全一冊) (内容) 語物時代の歌謠 能樂創起時代の歌謠
- 日本の小歌 (全一冊) (内容) 小謠流行時代の歌謠 小唄發現時代の歌謠 蛇皮線輸入時代の歌謠
- 日本の小唄 (全三冊) (内容) 三絃樂創始時代の歌謠 三絃樂漸盛時代の歌謠 三絃樂隆盛時代の歌謠
- 日本の民謠 (全一冊) (内容) 諸國民謠近世調時歌謠
- 日本の長い小唄 (全一冊) (内容) 民間舞踊勃興時代歌謠
- 日本の俚謠 (全一冊) (内容) 農事唄普及時代の歌謠 地方唄大成時代の歌謠
- 日本の俗謠 (全一冊) (内容) 俗曲隆盛時代歌謠其他
- 日本の流行唄 (全一冊) (内容) 時代の流行唄その他
- 日本の童謠 (全一冊) (内容) 地方唄流行時代流行唄 時代別としての童謠 分類別としての童謠

◆各册皆特異の詩趣溢る◆

◆美しい本。氣もちのよい本。爲になる本◆

處女讀本

◆三六版凡二百頁裝幀頗優美木版刷入
 ◆定價(一冊)金壹圓八拾錢(送料八錢)
 日本傳説叢書刊行會發行
 電話 神田二二九二番
 振替 東京八四四六番

●是非心得ておかなければならぬ

藤澤衛彦氏著

◇眞に心の美しい處女の讀みもの。
 ◇面白く記事と珍らしい材料が盛り込まれてある。常識養成の爲の趣味の本。

新刊

おもしろい年中行事の話

處女讀本 第一篇

第二篇 第三篇

傳説花物語
 名女物語

第四篇 第五篇

自然の美と恵み
 諸國の遊戯

宮内省圖書頭 文學博士 森林太郎先生顧問
 帝室博物館長 醫學博士
 京都帝國大學 文學博士 喜田貞吉先生顧問
 文科大學教授
 日本傳説學會主幹 藤澤衛彦先生編著
 宗教哲學の父 歴史文藝の母

東京市神田區錦町一丁目

日本傳説叢書刊行會

電話・神田二二九二番
 振替・東京八四四六番

會員募集

日本傳説叢書

賜天覽
 賜台覽

◇平和は、今、東方に秀づる、我傳説の美の國、是を専らにせんぞす。
 ◇時は來れり、山村水廓に、その豊かなる、わが郷土の傳説を知るの。

◆世界に誇るべし 燦然たる純日本の所産に於て出版界空前なる大努力の結晶◆
 ◆記録に我郷土の山村水廓に豊かなる神話傳説民謡童話口碑の一大蒐集◆

- 分 容 内
- 一、説明傳説 (起原・地名・事物・時代・天然・神話的・人間・動物)
 - 二、神話傳説 (諸神出現・活動・治水・神戰・神婚・妖怪退治)
 - 三、開闢傳説 (開闢・陸地出現・陷沒・橋樑・神跡)
 - 四、巨人傳説 (巨人出現・大太法師・足跡・手痕)
 - 五、英雄傳説 (說明・出生・自盡・徘徊・隱遁・戰爭・妖怪退治)
 - 六、美人傳説 (貞操・處女・受胎・船橋・妻爭・小町式・咲耶姬式)
 - 七、天女傳説 (羽衣・天女・乙姬・機姫・星姫・佐保姫・虹姫)
 - 八、長者傳説 (長者・出現・成功・陷落・不成功・日輪招戻・如意寶珠・金紐・寶鏡・埋金・飯持込・民間運命信仰)
 - 九、金鶏咒呪傳説 (妨礙・天邪鬼・鷄啼・物爭・力競)
 - 十、宗教傳説 (緣起・靈跡・高僧傳・再生・教化・靈杖・祟罰・呪咀)
 - 十一、祭神傳説 (諸神說明・緣起・神跡・人文・祖神・邪神・福神・祟罰)
 - 十二、犬神及猿神傳説 (犬神・猿神・退治・義犬塚・動物報恩・人狼)
 - 十三、鬼魔傳説 (鬼・鬼女・天邪鬼・鬼賊・鬼神・天狗・魔女・魔神)
 - 十四、妖怪變化傳説 (妖怪退治・魃・魍魎・通り魔・怪獸・妖鳥・怪魚)
 - 十五、妖怪傳説 (七不思議・人影・化身・蛇身・分身・悲跡・火柱・怪光・怪火・魔水)
 - 十六、山姥傳説 (山父・山母・山姥・山童・山男・鬚坊主・毛坊主)
 - 十七、幽霊傳説 (怨靈・報恩・依頼・子育・生靈・死靈・人魂・泣聲)
 - 十八、人柱傳説 (人柱・身代・人身御供・贊供・人身生埋)
 - 十九、城跡傳説 (城跡・居所・城將・戰爭・守護神・落城・白旗・白鳩・旗立・武器)
 - 二十、墳墓傳説 (墳墓・物塚・糠塚・比翼塚・貝塚)

●●來出版重●●

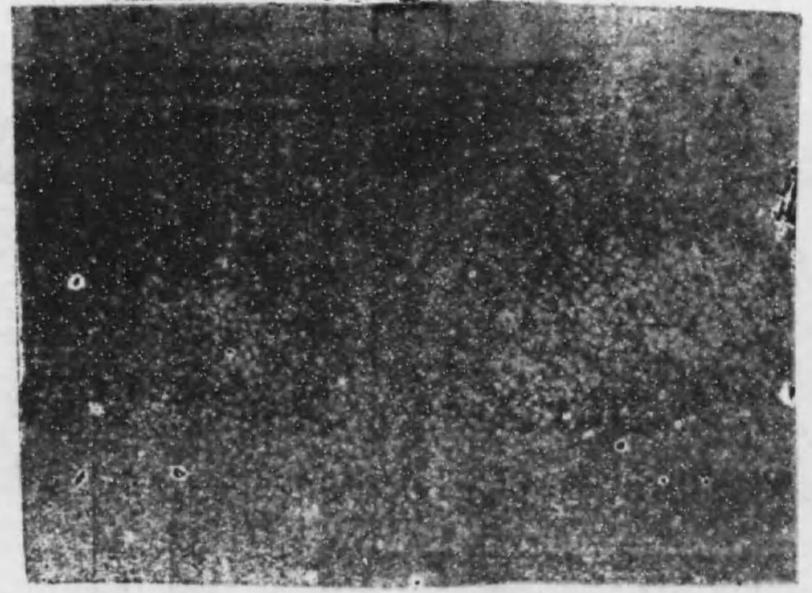
北武藏の卷 下總の卷
 阿波の卷 安房の卷
 上總の卷 讚岐の卷
 信濃の卷 伊賀の卷
 播磨の卷 伊豆の卷
 明石の卷 和泉の卷
 佐渡の卷 以上

▼略規▲

- ◆全二十四冊一定本・四六版上製
- ◆每冊四百頁・口繪挿繪數葉入
- ◆各冊美麗函入・裝幀杉浦非水氏
- ◆會費貳圓五拾錢
- ◆國別見本分賣一冊金參圓也

類 の 總 項 目

- 二十三、古穴傳説 (人穴・拔穴・底無・怪住・岩戸・風穴・桐貨穴・寶庫)
- 二十四、天界神話 (太陽・月陰・星辰・雷電・風雲・雨雪・虹)
- 二十五、水界神話 (水神・湧泉・靈水・名水・潮吹・渦卷・水無瀨・波女男波)
- 二十六、龍宮傳説 (龍宮・浦島式・水底機織・震氣樓)
- 二十七、養老傳説 (養老・子也清水・酒泉)
- 二十八、姥捨傳説 (棄老・姥捨)
- 二十九、八百比丘尼傳説 (河童・河童菜・河童駒引)
- 三十、山岳傳説 (山岳出現・精靈・兩岳背競・戰爭・雙子山・變態)
- 三十一、湖沼傳説 (出現・主・湖沼退治・姥池・鞍掛沼・龍蛇・人蛇・物影・投身・片眼魚)
- 三十二、沈鐘傳説 (沈鐘・泣聲・捨鐘)
- 三十三、岩石傳説 (化石・奇石・力石・子持石・靈石・成長・神石・陰陽・咒痕・石芋・石泣)
- 三十四、草木傳説 (巨木・神木・靈木・精靈・怪草・靈禾・御木・森林・二本木・名木・杖立・箒木・飛木・目標・何ちやもんちや片葉・筆塚)
- 三十五、民間說話傳説 (口碑・童話・お國自慢・頓智・薄馬・鹿夢・小人・化され・人喚・魔術的・秘授・歌謠・俚諺・說明・民間信仰・風俗・禁呪卜占・治療・鬮毛)
- 三十六、天然傳説 (動物譬喩・動物戰爭・化身・變身・屍體・植物譬喩)
- 三十七、史傳的傳説 (史傳的・神史傳的・逸話的・御幸・歌舞伎)
- 三十八、特殊動物傳説 (鵜・百足・犀・蛸・蟹・蜘蛛・狸)
- 三十九、音樂的傳説 (秘授・笛伏・鸚鵡式・山彦・馬鹿離子)
- 四十、器物的傳説 (器物精靈・鏡・劍・曲玉)
- 四十一、其他



◆表紙紙裁實物寫真見本◆

發表の際諷諷たる新聞批評の一端(抄録)
に於ける

◇東京朝日新聞曰く。其土地土地に存する特殊の傳説は、種種の意味に於て人の感興を惹く蓋し傳説は我等祖先の思想感情の最も矯飾なき表白にして、且歴史的及文學的の趣味と利益とは、限りなき是等の傳説中より湧き來り盡きざるを覺えしむ。著者の此方面の彙集と研究とは、又特殊の物として多數人の注意を惹くに足る。

◇大阪朝日新聞曰く。民謡傳説口碑の類を蒐集し、之を調査する事は、一國の歴史・文藝・宗教・哲學等を考究する者に取つて極めて必要あり、且つ、其研究を助くる必要な資料ともなる。此點に於て、本書の刊行は極めて有意義である。其刊行されたる物を見るに、編者が材料の蒐集に勞を用ひ、意を盡しただけあつて、吾人を喜ばすものが多大である。各種に就いて、詳細なる解説を附し、古典を示し、尙學者の疑義解説の参考すべきものを引

終